23-254
工 3A40

高頭式編纂

日本山嶽志

東京博文館藏版

博文館藏書

仁者樂山

仁者樂山

梁川

橘庵

金子十六歳後片岡村ニ帰住セルヤ
貧ニシテ村塾ニ耕読ス自ラ信州丸山
先生ニ学ビ書ヲ作ル巧ニ至ル澤
村ノ母ハ高頸碧水字清蔵君
亦此ニ生ル聡ニ存リ秀才君爾ニ

抜キ余ニ示キシト二年前ノ冬ニ常彦
ニ呉ル事ヲ以テ雪夜明ノ時手ヲ携
テ後山ニ登リ杉ノ下ニ坐シ殖長八
海蘭門米山等ノ諸山ヲ指点シテ
古今ノ語リ尽クハ詩料ノ貧ル
因縁指ノ屈スベキモノ甲斐前

ニ在リ碧海ノ南ニ逝矣須臾
ノ間顧ミ君自書日本山獄
詩ノ指示ヲ一言ノ雪ヲ雨ヲ
スルニ帝国ノ名山悉ク恵キ
昔年大人碧海ノ南ト共ニ指点シ
タル諸山亦皆収テ其中ニ在リ而

シテ名ノ此書ニ表シタル所以ノ情
三島先生ノ序ニ詳ニセリ
余性来若碧水石ヲシテ在
世間書ヲ見セシメバ其書果シテ
存ス乎余今此書ニ對シ感慨
ノ情ヲ抑ヘ難シ
明治三十年

シテ之ヲ題ス

明治三十八年五月廿日 岩海
軍大將子爵
東郷平八郎

勅撰之印
北海道圖書館

日本山嶽志序

高頭君名式。稱仁兵衛。越後三島郡富豪也。十數年前在余門。年猶少。羸弱善疾。如不堪業者。會喪父歸鄉執家政。余臨別戒之曰。子承祖先之業。任在守成。勿入政黨求虛名。勿營新業貪暴利。適足以墜先業矣。不若勤儉保守之暇讀書以資實踐也。其後久絕消息。客冬突如來訪。其貌肥大。其氣軒昂。非復昔日仁兵衛。余驚曰。何以致此。曰。弟常歎羸弱

以生。不若遄死。偶讀某書。曰。塙保己一有宿痾。周遊天下三年。始全愈。大有感焉。自此暇則事遊步。而水有漁船。陸有火輪人馬之車。疲倦則乘。無復遊步之効。於是起登山之志。自富士筑波。至近鄉八海諸高山。莫不盡登攀。而山嶽無車船可以醫疲倦。疲倦之極。達巔嶺而憩。愉快不可言。加之眺矚可以資地理之學。探訪可以資鑛石動植之學。如此十年。羸弱變爲強壯。蓋亦遵先生教訓之効也。

又何暇入政黨營新業。而先業亦益增殖。幸慰高懷。余深喜豫戒之不徒也。頃又寄書曰。弟雖好登山。有家務。不能周遊海內。於是涉獵羣書關山嶽者。綱羅採集。及一千餘山。命曰名山綱。然浩瀚難示衆。因拔萃之。曰日本山嶽志。將上梓頒海內同好之士。爲登山指南。蓋亦欲化同病之人爲強壯之身也。先生幸序之。嗚呼余平生有持論。曰。富國之策。在家家富其產。強兵之術。在人人強其身。而近

世稱政畧家者。口唱富國。而其產空乏。負債如山。口唱強兵。而其身遊惰。耽酒色。釀疾病。以此成家者。猶可恕。世之富豪惑其勸誘。傚其所爲。改先業。營新業。新業非暖飽子弟不嘗辛酸者所能堪。遂陷貧困病死者不少。是余所以戒其入政黨營新業。而今仁兵衛能守之。富其產。強其身。更著書。欲以已經驗敷及海內子弟。余之喜更何如也。夫一人一家積爲一國。則一千萬家之富。五千萬人之強。

謂之日本國之富強。全國既富強。奉萬代一系 聖天子。以橫行五大洲。何難之有。於是乎仁兵衛草鞋竹杖。凌險駕阻。立雪山月山之巔。小坤輿。其愉快不亦更偉大乎。是爲序。

明治甲辰孟春

七十五翁中洲三島毅撰

日本山嶽志序

吾幼時日本外史を讀む、開卷言へる有り、云ふ、襄嘗て宋の蘇轍が韓魏公に上る書を讀みて之を愛し、以爲へらく、昔より言を當世の王侯に進むる者、大抵求むる有りて自ら售る、識者の醜とする所、獨り轍、魏公の人物を偉なりとし、之を名山大川に比し、其言貌に接し、以て己が作文の氣を養はむと欲す、言狂に近しと雖も、其澹泊求むる無き、知る可きなりと。稍長して史記を讀む、其太史公自序に云ふ、遷龍門に生れ、河山の陽に耕牧す、年十歲、則ち古文を誦す、二十にして南江淮に遊ひ、會稽に上り、禹穴を探り、九疑を闚ひ、沅湘に浮び、北汶泗を涉り、業を齊魯の都に講し、孔子の遺風を觀、鄒嶧に鄉射し、鄱薛彭城に厄困し、梁楚を過ぎて以て歸ると。名山大川の士を敎化する、洵に斯の如

き者有り。吾嘗て人に語りて曰ふ、萬卷を破り、千里を行き、百人に交り、乃ち以て士と爲るべしと。蘇轍や賴襄や、幸に生れて偉人に邂逅す、乃ち之を名山大川に比して以て其氣を養ふに供す、而も偉人や必すしも世〻にして出でず、能く出づるも之に接するの機有ること罕なり、則ち士の修養切磋に於ける、直に之を書帙と山川とに求めざる可からず。明治の世、時運正に會し、才人林の如く、俊髦雲に似たり、而も偉人傑士の接して以て浩氣を養ふに足る者を求むる、寥寥として有ること少なり。吉田松陰曰ふ、人古今に通せず、聖賢を師とせずんば則ち鄙夫のみ、讀書尙友は君子の事なりと、今の時、冗冗として範を當世の所謂先覺なる者に求むる、唯瞶瞶として氣格の日に下るを見むのみ。我邦山水の勝、衡を宇內に爭ふに足ると稱す、而も多く

是れ規模偏小、明媚を以て勝り、優麗を以て鳴る者、恰も猶才人俊髦の狃れ易く使ひ易きがごとし、獨り山嶽の巍峨崒嵂、遒勁峭拔の雄姿を以て八道の隨處に卓視せる、東海日出の國土をして眞に坤輿の首腦たらしむる所以、士、道に志して範型を眼前に求むる、其れ唯我名山大嶽に在りとせむか。芒鞋百里の雲山を踏破し、東海の第一峯に登臨し、長風に嘯き天下を小なりとするの時、胸宇復世間齷齪の事あるを容れむや、而して經綸の識量亦自ら此間に養ひ得らるゝ者なくんばあらず。海峯高頭君は吾と同鄕の士、家に貲財を擁し、尤も尋常飽暖の徒に伍するを屑とせず、夙に道を中洲三島翁に問ひ、藏書二萬卷、閒讀靜玩悠悠として自得す。性本と丘山を愛し、凡そ事の山嶽に涉る者、檢討考證、累年積みて鉅册を成す、今の青年、口舌徒に巧に

して柔懦或は風を成すを虞れ、先つ手錄を抄して日本山嶽志一卷を作る。將に諸を世に公にせむとし、而して吾亦序文の需に與る、吾既に君の志操を高しとし、亦君の事業を美とす、一辭の題なかる可けむや。思ふに史遷の漢時に於ける、賴襄の幕末に於ける、皆意鬱結する所あり、其道を通するを得ず、故に往事を述べて來者を思ふ、文章は不朽の盛事、文士筆を揮ひ、武人劒を提ぐ、其人世に於ける、異途にして同歸、而して千秋の事業、乃ち慘憺たる修養の果なり。世の道に志す者、尋常地學の研究を以て斯書を視ず、必ず修養切磋に資するを以て期とする、其れ得る所有るに庶幾からむか。若し夫れ徒に書中の烟霞に沈耽し、活象を行旅に探りて親しく名山大嶽に接するに力めざる、若くは名山大嶽に接して、而も竟に克く作文の氣を養はざる

日本山嶽志序

明治三十三年七月、余、巴里よりストラスブルグを經て、維也納に赴き、八月ツューリッヒ、ヂュネーブを經て、アルプス諸湖の間を繞迂して巴里に還れり。其途次ミュンヘンに至るや、恰も獨逸アルプス登山倶樂部の總會の後にして、老若男女エーデルワイス(みやまうすゆきさう)の徽章を簪し、金剛杖を曳きて停車場に集り、陸續アルプスに向ふを睹、因て富士山下の白衣の登山者に想ひ到り、高きに向ふの行樂、東西其揆を一にし、而かも其人物と其方法とを異にせるを感せり。

我邦に大山講・富士講・大峯講等、數多の登山倶樂部の性質を有する團體が、各其地方の高山を繞りて現存すること、猶ほ墺・獨・伊・佛・英の諸國にアルプス倶樂部あり、又は其支部あるが如き

を見るに、獨り都門人士が避暑旅行を以て、單に貴族的奢侈の風を逐ひ、却て斯の平民的にして、詩趣あり、實益ある好組織を藐視する、是れ吾人の怪訝に堪えざる所以。

田舍の盆踊と趣を同ふせる舞踏なるものが、高襟者流に隨喜の涙を以て迎へらるゝも、彼等間亦た一人の富士登山倶樂部を興し、以て現存せる富士講・大山講等と性質を同くし、更に其組織方法を好くせる一團體を作らんと試むるものなき、是れ大に遺憾とせる所以。

然るに、近年學生の登山、徒步旅行の氣風は漸く盛となり、幾十版を重ねたる矧川君の日本風景論が、斯の新好氣風を助長し、隨て山水美に關する文詞、高山植物採集栽培等の趣味、次第に行はれ、特に一兩年來、巾幗裙釵の流にして富士登山者あるを

聞くに至れり。吾人は登山倶樂部組織の、漸く我邦都門人士間に歡迎せらるゝ氣運に向へるを信じ、而して其成立の如きは、適當なる人の一擧手一投足の勞に待つあるのみにして、到底時日の問題たるに止まるを想はずんはあらず。

三十六年秋、水城君を介して高頭君と東京地學協會に相識り、君が自家登山の階梯として、先づ日本山嶽の記載を蒐め、併せて之を世に公にして、同好登山者の便を圖らんとするの美擧あるを聽き、且つ其既成數百葉の巨冊を看るを得たり。後ち君拮据稿を補ひ、又た余に諮る數次、頃日稿成り、刻亦た漸く就る。蓋し此書一ひ世に出ては、之によりて、登山者の興起するもの益多かるべく、而して登山倶樂部の好組織成立の時期、亦た漸く近からんとす、吾人の欣懷其れ何如ぞや。

抑も、吾人の登山倶樂部成立の必要を切言するは以なきに非ず、嘗て秩父山中の氷雪に、二人の學生が無慘なる凍死を遂げたるは、今尚ほ吾人の耳目に新なる所にして、今本文を草するに際し、又た乘鞍山中に數名の凍死者ありたるの報に接す、是皆登山者が適當なる注意準備と、地圖・案内書・案内者なくして、漫に深山幽谷に進入するの、甚だ危險なる實例なりとす。我邦には、アルプスの如き氷河凝雪なければ、年々歐米新聞に散見するが如き、登山者死傷の處なかるべきも、若し之を指導警戒するの方法を講ぜずんば、登山氣風の進運に對して、悲むべき障礙なきを保せず、倶樂部の成立此に至りて、益其急務たるを覺ゆるなり。

吾人の素望此の如し、今此書の出づるに遇ひ、一端を借りて之を讀者諸君に披瀝し、且つ之を組織するの方法を、著者高頭君に諮ることとしかり。

明治三十八年八月十三日都門富士の一尖を望むの處に於て

鐵椎學人謹識

日本山嶽志の撰修に就きて

小島烏水

回顧すれば、今より十年前、北越線の汽車に搭して、碓氷峠を過ぐ、偶ま晩秋の夕、崢嶸なる淺間山の赭岩は、黯蒼なる偃松の衣皺を破りて、躍如痩骨を尖らし、絶巓の巨口は、天火を秘むる甕なればにや、黄焔騰上して、附近に出頭沒頭せる料峭の連山を炙り、東の方上毛の天を燒いて、先尖端の白氣は、無涯の闇に溯洄し、竟に復た見えず、是れ靈山の石を敲いて、燧發する天火なるなからんや、翌日淺間に上りて大なる恐怖と、幻覺とを獲たり、是より秘密は我が胸に宿りぬ、天上の山姫は、我が初めて覺えたる少年の戀なりき、而して今猶現在の戀なり、老來おそら

くば亦然らんのみ。

抑も山の物たる、朝には光塔、夜には紫微宮、晝には地平線上に雞冠立せる大朶透明の深秘塊となる、我は今、事新らしく山の美を縷述するに堪へず、嘗て山の繪畫的容貌を說きて曰く、

天下何物か、線より成らざる形體あらむ、樹木の垂直なり、斜曲なる平野湖沼の水平なり、弧狀なる日輪月輪の圓なり、半圓なる高塔の上尖りて下大に、或は方なる、或は六角なる、皆各美を其一方に恣にす、然れども、あらゆる太線細線を湊合し、配置し、對複し、離乖して、虛空の白紙に皴を走らし、皺を引き、縱橫に交叉して、いかなる黑風白雨も、之を抹殺する能はざる畫圖を作るものは、地球上單だ山是れのみ、平野、湖沼、河海の如きは、劃線大概一樣にして整齊、たとへば能品の文の

如し、山に至りては、突兀として高聳し、逶迤として低走す、その段落次序、大粗にして小工ならず、則ち大粗なりと雖、豪氣盤空、眞にこれ天品の文なり、(鄙著『日本山水論』)

と然れども線の多樣多趣は、人間猶之を能くす、山の美は色の變幻陸離にして、光澤の純粹たるにあり、天地間、色を以て、之に競ひ得るものは、獨り雲あれども、時間は朝と夕とに止まりて、永劫にあらず、且つ山の形體は、海の如き廣濶一式にあらず、山の生殖物は、樹木、禽獸、蟲魚、亦自ら下界の物と異なりて、特色あり、科學をきはむるもののために、山は綜合的把手となりて、天文、氣象、數學、物理等に、便宜よき位置と、材料とを給與し、歷史家のためには、陸上の嶋嶼となりて、輙ち湮滅せられざる秘庫を建つ、故に山に登るは則ち簡にして至細、密にして至大なる、一

部天然人事を縮寫したる、始末史を讀むなり、且つ登山は、一日に四季の變幻を經驗するを以て、時間に於て、空間に於て、宇宙を具體的に短縮したる統計なり。

ラスキンは好みて山を描けり彼が『近世畫家』の一節に曰く、

山は人類の爲に作られたる學堂にして、又寺院なり、學者の爲には萬卷の智識的秘藏庫となり、思想家のためには靜隱の栖家を供し、宗教家には聖光を附與す、山は實に渾圓球上の大寺院なり、岩の戸あり、雲の柱あり、消々の流水と、磴々の磊礫との私語は、以て聖歌に比すべく、玲瓏の白雪は、以て聖壇に較ひつべし、而して燦たる星光を以て、鏤刻せられたる蒼昊は、是れ院内の圓天窓にあらずや。

是を以てバイロンはアルプスを讃美し、ニイチエも亦山を絶

愛し、李太白は『一生好入名山遊』といひぬ、山の趣味及び登山の利益、快樂、必要、山に對する人間の感情及び交渉等は、嘗て精細に鄙著『日本山水論』中に述べたるを以て、重ねて茲に贅せず。

獨り怪しむ、登山の必要、緊急、彼が如くして日本人の山を識らざるは何ぞや、支那五嶽の宗と崇仰せらるゝ泰山は、海拔僅に一千五百米突、其高距我が不二山の半にだも達せざるに、かの國人崇敬措かずして、人類、神話、宗教、博物、考古、歷史の諸學この山を中心として、發達せるにあらずや、米國の如き曠漠の原野多くして、生涯山を知らざる人すらあり、しかも夏日加那陀落機山に向つて、群到する登山客多きは何ぞや、若し夫れアルプスの連嶺、空中に雪線を描き、地上に水晶河を奔らすところ、全歐人環視の聖壇となり、登山の氣風、婦人老人にまで及び、アル

プス倶樂部の設立となり、精細なる地圖は出版せられ、動植物の如きも大抵研究しつくされ、峻峰は所在小舍を設けて宿泊の便を與へ、登山路は開拓せられ、嚮導者は養成せられ、其登山記事の如きは、普ねく諸國の新聞雜誌に公示して、世人と快樂を頒つに至るまでに、山嶽研究に熱心なるにあらずや、余は日本に於て獨り此事なしと言はず、不二山の如き、木曾御嶽の如き、越中立山の如き、加賀白山の如き、夏日登山者の絡繹として絶えざるは、敢へて彼等に讓らざるべしと雖ども、不二を除きて他の大部分は、白衣道客輩の蹂躪に任ずるのみ、一般公衆には幾んど相渉らざるにあらずや、抑も日本の平地は、全面積の九分の一に過ぎずして、他は山嶽及びその眷屬なる磯野、森林、河谷等にて充たさる、日本の名山と稱せらるゝもの、幾百座、而

して公衆その名を識るものすら、各人十指に充たざるを常とするに至りては吾人豈憾みなきを得んや、一方に於て地理書類は山岳の苗字を目錄的に羅列すれども、詳細なる解説は與へられず、殊に既成地圖の如き、山地に至りて、誤謬錯迷甚だしく、何等の用を成さゝもの多く、東京の二學生が曾て參謀本部二十萬分一圖に欺かれて、秩父の山中に路を失ひ、竟に凍死したる悲劇は、今猶都人士の耳に新なるところにあらずや。

是に於て地理書中に、山嶽地理なかる可らず、山嶽の自然研究に於て、日本にフムボルド氏、チンダル氏等のアルプス紀行を見る能はず、山嶽と人事の關係を悉くしたるものに、ハッチンソン氏の山嶽論を有せざるは、實に斯道の闕陷なり、然れども斯の如き曠世の大作は、今俄に望んで得可らざるのみならず、

殊に科學研究の如きは、專門分業に屬するを以て、余はせめて、何人にも宜き山嶽案内記の類、世に出て、普遍的に全國の人士に讀まれむことを希ふ。是れ山嶽研究の第一歩なり、先たざるべからず、前まざる可らず、今や登山の氣風幸に國民の一部に瀰り、爾後益す多からんとする傾向あり、況んや、東亞漸く平康を得、我が國民安んじて、各自其嗜むところに向ひて、動くの餘裕を得むとする今日をや、山嶽案内は、應さにこの時に出づべかりし、

余山嶽地理の不備を憂ひ、竊に群籍を渉獵する傍ら、新聞雜誌の記事にして、山嶽研究に資するものは、觸目必ず貯へざるなく、儲藏幾卷に至ると雖も、忙劇なる職業を有せる余は、專心好むところの調査に從ふ能はざるのみならず、歳月を經ること

久うして、却つて貯へたるを散佚し、且つ嗜好の熱に高低ありて、一紙半箋を稿するに及ばず、荏苒爲すなくして今浩瀚なる『日本山嶽志』が、同好高頭式君によりて大成せらるゝを見る、慚愧且つ抃舞、本邦地學界のため大白を擧げて祝さむことを思ふ、初め高頭君『山嶽志』の手稿若干を携へて、余を訪はる、一閲するに山嶽を系に別ち、系を又脈に小別し、脈中の山嶽を順次に列擧し、山嶽の名稱及び別名、標高、解説等を附し、大抵の名山には圖畫を挿み、周密叮寧に罫紙に規則正しく書れたり、その山の數と、一山の解説に費やされたる紙の量とによりて判すれば、若し全部の原稿を積まば、おそらく天椽に達したりしも未だ知る可らず、余は驚喜措かず、その大成を奬む、君又余に徵すに、微力の援を以てせらる、余何ぞ辭せむ、即ち藏するところの

材料を原ね、君の手稿と較へて、若干を增補す、然れども增補せるところは分寸にして、君によりて誨を受けたるところは山の如く大なり、抑も高頭氏は越後の豪族、君その家に人と爲り、若年病を以て、幾んと學を廢するの厄に遭ふ、已にして志を立て、夙に本邦山嶽志を修めんと欲し、六年の間拮据經營、專心この大業に熱中し、文書の廣搜博羅到らざるところなく、斯學者に就きて、材料拾索の勞をきはめ、竟に其底蘊はこの大著となりて示さる、本邦に山嶽記載の書、至つて乏しきを知るものは、君が本書を撰することの、難業なるを知らむ、『日本山嶽志』に幾多の缺點を有するとも、本邦にありて、この種の書を撰したる嚆矢の稱は、君に上らざるを得ず、君の忍耐、君の嗜好、君の有する日月は、この書を大成せしめたりと雖も、君が家貲の富を

捐て、一意斯業に盡瘁したるの公心に至りては、蓋し本邦富豪中、稀に見るところのものなり、余は君を敬す。

余初めて君の手稿を檢するとき、中央大山系の名山を注疏するところ、往々倫敦マアレイ發行の Hand Book for Japan に憑據せるところあるを見て、感慨措く能はざる者あり、夫れこの書は、素と本邦案內の用として、外人に示さむため、外人の撰述したるものに係はる、今日本の山嶽地理を編するに當り、這個の書籍を飜譯するにあらずんば、他に途なしといふに至りては、學問に內外の別なしと雖ども、本邦學界の光榮にあらざるべし、余の如きも、中央大山系中の名山に入らんとするときは、本邦の書に絕えて記述なきを以て、多く手翰を飛ばして、東京横濱在留の外人に敎を乞ひ、然る後發するを常とし、前に擧げ

たる Hand Book for Japan は、今舊大學教授チャムバレイン氏、英國公使館メーソン氏二人の手によりて訂刪の半にあり、改版發市の期將さに近きにあらむとす、『日本アルプス』の著者ウエストン氏の如き、今は英京倫敦に歸りて、日本信濃飛驒の山嶽に就き、地學協會、アルプス倶樂部等に、精細なる講演を與へつゝありといふ、而して邦人蠢々然相知らず、余輩豈慚色なきを得むや、故に『日本山嶽志』亦外人の教へを受けたるところ多し、余が增補したるものは、悉く自家登山の手記によりて、一切他を襲はざるを期したりと雖も、自家登山の數は、僅に五十に充たず、殊に中央大山系以外の山嶽は、余の登攀せざるところ、きはめて多きを以て、これらは一に所藏の拔萃帖より借り、出所を文尾の括弧内に署して作家の德義に違はざらむを是

れ務めたれど、余が拔萃帖は、初めより今日の事あるを期して、編せられたるものにあらざるが故に、新聞雜誌の切り拔き、紀行文の手寫等に、或は作者の名を逸し、或は何年頃のものなりしかを附記することを忘れ、隨ひて現在の狀態と、差繆なきを得るやも保し能はず、この點に於て、余は大方の宥恕を乞ふの外はある可らず、蓋し高頭君と余と、共に本書の記事に、毫末の過誤脫漏なしとは、いかに自信の强きを以てするも、到底點頭し能はざるところ、然りと雖も、人力素と制限あり、人の足跡亦狹し、二人徒に不備に耻ちて、頭岑々の懊惱を幾百回するは、寧ろ普ねく世に布いて、大方の指摘教示を俟ち、改竄增減、再三の後、完全に近きものを獲むに如かざるべしと、是に於て本書の公刊成れり、復ねて言ふ、本書に麁漏杜撰あらば、高頭君と余と

共に、之を敎へられむことを、切に江湖に請ふ所以は、本書は素と、作者等の目意工匠を以て縱まに規矩したる製作品にあらず、純然たる類聚的字彙的のものにして、日本の名山、もし日本國民の供有ならば、この種の書、亦山嶽國民の常備品たらざるべからざればなり、則ち缺漏を見て、趁貼數次するは、之を江湖の厚情に須つべく、君は先づその原文を提示し、余は之に傍記したるのみ、余自ら計らずと雖、豈君が半生涯苦心の大業に、肆然序筆を下すものならんや、本書の一部には余亦責あること前述の如し、故に茲に本書公刊の顚末と、著者希望の在るところを明らかにするのみ。

日本山嶽志編纂主旨

砲煙天ヲ蔽ヒ、濛々冪々タリ、彈雨ノ下、劍光閃キ、喚聲起ル、六十萬ノ貔貅ハ、平砂ニ萬幕ヲ連ヲ、三十萬噸ノ艨艟ハ、逆浪怒濤ヲ蹴テ、或ハ擊破シ、或ハ封鎖シ、或ハ遊弋ス、隴上潦海、處女ノ如ク、脫兎ノ如ク、崔崒ヲ攀ヅルガ如ク、磐石ヲ千仞ノ谷ニ轉ズルガ如ク、遲トナリ、敏トナリ、鈍トナリ、尖トナリ、寬トナリ、嚴トナリ、敵ヲシテ施スニ術ナク、計ルニ策ナカラシムルモノ、實ニ是レ我大日本帝國戰時活動ノ態度ニ非ズヤ、彼ノ露國ハ、邦大人長、其將士ハ皆百戰塲ヲ經過シ來リテ、驍勇絕倫、精練無比、到底小國短人ナル、我大日本帝國ノ敵手ナラザルニ似タリ、獨リ露國ノ斯ク信ゼルノミナラズ、英米ノ外、世界ヲ擧ゲテ斯ク信ゼルモノ、故ナキニアラザルナリ、而シテ仁川沖ノ海戰トナリ、旅順

ノ封鎖トナリ、鴨綠江ノ掩擊トナリ、南山ノ占領トナリ、得利寺ノ鏖戰トナル、露國則チ言ヲナシテ曰ク、是レ豫定ノ退却ナリ、敵ヲ危地ニ陷レントスルノミ、日本ハ海東ノ小島國、大野戰ニ堪ユルモノニ非ズト、次デ遼陽ノ占領トナリ、沙河ノ會戰トナリ、旅順ノ開城トナル、露國又言ヲナシテ曰ク、日本善謀善戰スト雖トモ、軀幹矮小、大追擊ヲ能クスルモノニ非ズト、歐人之ニ贊スルモノアリ、夫レ大鵬ノ飛揚セザルハ、扶搖ノ風ヲ待ツノミ、彼ノ斥鷃亦タ何ヲカ知ランヤ、俄然奉天ノ戰鬪ハ開始セリ、十數日ノ大追擊、空前未曾有ノ大捷ヲ博シ、强辯饒舌ナル露國ヲシテ、遂ニ沈默セシム、露國既ニ一ノ勝算ナキニアラズヤ、宜シク媾和シテ、以テ民心ヲ安ンズ可キナリ、而シテ尙ホ其ノ波艦隊ヲ派遣シテ、僥倖ヲ萬一ニ期シ、無辜ノ民ヲ殺シテ省ミザ

ラントス、此ノ如クニシテ何ゾ天意人心ヲ得ンヤ、故ニ國內紛擾相次ギ、太公毒手ニ斃レ、帝亦タ高眠スル能ハズ、悲愴ノ觀、正ニ我大日本帝國ノ歡呼ト相反ス、嗚呼曩ニ露國ヲシテ、好意以テ我ヲ指導スルコト、米國ノ如クナラシメバ、何ゾ今日ノ慘事ヲ見ンヤ、明治八年ト、明治二十八年トハ、我ヲシテ臥薪嘗膽セシメ、猶ホ又我ヲ壓伏セントセリ、此ニ於テカ我大日本帝國ハ、自衛ノ爲メ、將タ人道ノ爲メ、開戰ノ已ムヲ得ザルニ至レリ、乃チ擧國一致、官民協力、出テハ則チ粉骨碎身、ヨク其任務ヲ盡シ、一死國難ニ殉ゼンコトヲ期シ、入ツテハ則チ銳意貨殖ヲ計リ、以テ軍資ヲ充實ナラシメンコトヲ期ス、コヽヲ以テ、開戰以來未ダ一回ノ敗北ダニアラザルナリ、其奮戰健鬪ノ狀ハ、是レ平時ニ於ケル一家團欒、花ニ遊ビ、月ニ吟ズルノ和樂、異ナルナ

キナリ、仁義忠信孝悌、均シク一ノ至誠ナレバナリ、至誠ノ貫徹スル所、何ゾ天祐ナカランヤ、而シテ我國民ノ高潔瀟洒ナル、其罪ヲ惡ンデ其人ヲ惡マズ、時ニ敵ト談笑歡娛シテ、同胞ノ觀アルニ至ル、其心事ノ絢美ナル何ゾ花ノ如クナルヤ、每戰必勝ノ決シテ偶然ナラザルヲ知ルナリ。

今ヤ陽春四月、八十五州到ルトコロ櫻花亂發シテ、雲ノ如ク、霞ノ如ク、マタ雪ノ如クナルヲ見ル、而シテ世ノ悲觀者ハ、一刻千金ノ好時節ト、萬歲一遇ノ戰勝トニ遭遇シ、而カモ猶ホ樂觀スル能ハズ、徒ニ遠征軍人ノ苦勞ニノミ想到シ、娛樂ス可キノ時ニ非ズトナシ、觀櫻ノ悞樂ヲ廢シテ、其費用ヲ軍事ニ移サントス、此說一理ナキニアラズ、然レドモ此ノ如ク諸事消極ニノミ走ラバ、終ニ萎靡振ハズ、萬事成スナキニ至ラン、是レ豈ニ遠征軍人ノ之ヲ聞テ愉快トスル所ナランヤ、櫻花既ニ開ク、宜シク之ヲ觀、又タ之ヲ樂ムベシ、吾人未ダ强テ人情ニ戾リ、天ニ背クノ可ナルヲ見ザルナリ、且ツ夫レ、終日塵埃裡ニ齷齪タル者、花下一日ノ遊ヲ竟クシテ、平常ノ勞苦ヲ慰安シ、以テ益々事ニ精勵セバ、吾レ其百益アルヲ知ツテ、一害アルヲ知ラザルナリ、浮華驕奢ノ風ノ如キハ、之ヲ嚴戒スル、獨リ戰時ノミニアラザルナリ、聞ク今年ノ觀櫻、亦平常ニ異ナルナキナリト、此ノ如クニシテ始テ我大日本帝國ノ國力ハ、綽々トシテ餘裕アルヲ示セルモノニ非ズヤ、是レヲ彼ノ罷工同盟シテ、慘狀ヲ極ムルモノニ比スレバ、豈ニ啻ニ、霄壤月鼈ノ差ノミナランヤ、正ニ是レ、發爲萬朶櫻、衆芳難與儔、凝爲百練鐵、銳利可斷鍪ノ時ニシテ、我大日本帝國ノ、精華ト、純美トヲ、發揮シテ餘蘊ナキモノニ非ズヤ、

而シテ余ガ編纂セル小册子『日本山嶽志』偶々成ル。

回顧スレバ、明治三十五年夏、余此稿ヲ起シ、三十六年猛冬脱稿シ、將ニ明春ヲ以テ印刷ニ付セントシ、書ヲ三島先生ニ寄セテ序ヲ請ヘリ、時ヤ妖雲方サニ滿韓ノ野ニ盤結シ、戰機將ニ動カントスルモノヽ如ク、動カザラントスルモノヽ如ク、人々悲歌慷慨シテ、幽愁陰欝、恰モ吾鄉北越當時ノ天候ニ似タリキ、越テ二月、旅順港外一發ノ砲聲ハ、欝屈セル凝塊ヲ排シテ、人心頓ニ勇壯、活氣天ニ滿チ、萬歲ノ聲、坤軸ヲ動カス、余ガ弟ハ召集セラレ、余ガ親戚ハ入營シ、余ガ村人ハ出發セリ、余ハ獨リ上京シテ、此書ノ印刷ニ從事セントセシガ、同好者ノ敎示ニヨリ、更ニ訂正增補スルニ決心シ、再ビ鄉里ニ閑居セリ、爾來一捷ヲ聞キテ愉ト叫ビ、一嶽ヲ記シテ快ト稱シ、愉々快々、殆ンド一年ニシテ

完結セリ、偶々和歌勅題ハ下レリ、「新年ノ山」トイフ、余豈ニ欣然タラザルヲ得ンヤ。

想フニ我戰局ハ、大ニ發展シ、露國ハ益々煩悶苦惱ス可シト雖ドモ、彼モ亦一大强國ナリ、容易ク降ヲ乞フモノニ非ラズ、平和克復ノ日ノ如キハ、未ダ俄カニ期ス可カラザルナリ、吾人ハ身軀ヲ强フシ、剛氣ヲ練磨シ、以テ不時ノ急ニ備ヘザル可カラズ、而シテ此戰爭ヲ動機トシテ、露國ノ野心ヲ放棄セシメ、未開人種ヲ誘導シテ、東西相提携セシメ、世界團欒、萬邦和樂、復タ干戈ヲ見ザルニ至ラシムルハ、是レ我大日本帝國ノ大責任ニ非ズヤ、然ラバ則チ吾人ハ益々奮勵黽勉、全力ヲ盡シテ人道ノ興起ヲ計リ、國威ノ宣揚ニ努メザル可カラズ、吾ガ同胞五千萬衆、夫レ勉メヨヤ、左ニ三島先生ニ寄セタル、本書編纂ノ主旨ヲ掲ゲ

テ、以テ序ニ代フ。

明治三十八年四月二十三日　　編者識ス

群巒盡ル所平野アリ、平野窮マル所群巒アリ、高低參差、際涯ヲ知ラズ、名ヅケテ山嶽ト云ヒ、丘陵ト云ヒ、原野ト云ヒ、湖沼ト云ヒ、河川ト云ヒ、島嶼ト云フ、別ニ大瀛ノ水アリ、洋々六洲ヲ環ル、小ナリト云フニ非ズト雖ドモ、亦是レ一塊ノミ、即チ地球ナリ、吾人コヽニ棲息シ、所謂萬物ノ靈長ヲ以テ任ズル人類ニシテ、互ニ相反目シ、喧囂嘲罵スルガ如キハ、誠ニ蠢愚ノ極ニシテ、且ツ天ノ人類ヲ生ゼル所以ヲ知ラザルノ甚シキモノトイフ可キナリ、白皙人種、由來尊大自負、自己以外又文明ナルモノアルナシトシ、基督教以外又宗教ナルモノアルナシトシ、他人種又爲スアルナシトシ、傲然我ヲ輕侮ス、卿等知ラズヤ、我大日本帝國ハ、國ヲ建ツル三千年、上萬世一系ノ　聖天子ヲ戴キ、下忠君愛國ノ臣民アリ、其仁其武、世界ニ卓越ス、其ノ然ル所以ノモノハ他ナシ、我國民ハ性正善ヲ好ミ、邪惡ヲ憎ム、而シテ卿等ノ崇拜スル所ノ基督教外、儒教アリ、佛教アリ、皆我大日本帝國ニ傳リ來リ、渾然融化シテ一ノ國民思想ヲ成生セルニ因ルノミ、名ヅケテ大和魂トイフ、然レドモ精神的教育ヲ重ンゼルノ弊、物質的進化ヲ見ルコト少ナク、往々粗枝大葉ニ流ルヽガ如キハ、白玉ノ微疵タルヲ免レズ、乃チ他山ノ石玉ヲ攻カントシ、卿等ノ精巧緻密ノ學ヲ採リ、究理研鑽、茲ニ四十年、將ニ卿等ヲシテ後ニ瞠若タラシメントス、卿等活眼ナシ、故ニ之ヲ洞察スル能ハザルナリ、是ヲ以テ、明治二十七八年、我大日本帝國ノ韓國ヲ

援ケテ清國ヲ破ルヤ、卿等驚愕シ、周章セルモ、尚ホ我大日本帝國ノ精華ヲトリ、以テ卿等ノ短所ヲ補ヒ、以テ未開人種ヲ導キ、世界團欒、以テ喜ビ、以テ樂シムノ明ナク、識ナク、我大日本帝國ヲ猜疑シ、厭惡シ、陽ニ諦盟國ト稱シ、陰ニ黃禍論ヲ唱フ、會々卿等ノ有識者ノ我ニ好ヲ求ムルモノアレバ、卿等ノ多數ハ之ヲ嘲笑冷評セリ、嗚呼彼ノ波蘭ノ野、黑龍江ノ邊ノ如キ、我レ言フニ忍ビザルナリ、文明ナルモノ果シテ此ノ如キカ、基督ノ敎義ナルモノ果シテ此ノ如キカ、儒敎ハ然ラザルナリ、佛敎ハ然ラザルナリ、況ンヤ我大日本帝國ノ大和魂ニ於テヲヤ、然リト雖ドモ、尚ホ多ク白皙人種ニ學バザル可カラザルモノアリ、公德ノ如キ、冒險ノ如キ、其最モ大ナルモノナリ、今ノ我大日本帝國ハ、新思想ヲ咀嚼消化セント欲スルノ創業時代ニ屬ス、而シテ

之レガ成効ハ、青年諸子ニ待タザル可カラズ、諸子亦コヽニ見ル所アリ、鋭意專心、以テ複雜ナル學術ヲ修ム、其頭腦ヲ勞スルコト、彼ノ單純ナル漢學時代ノ比ニアラズ、コヽヲ以テ智育ニ傾キ、體育ヲ缺クノ弊ヲ生ジ、其健康ヲ害シ、或ハ斃レ、或ハ廢學ス、偶々業ヲ卒フル者ト雖ドモ、身神既ニ憊勞スルヲ以テ、其大事ヲ成スモノ果シテ幾何カアル、智育體育ハ、猶ホ車ノ兩輪、鳥ノ兩翼アルガ如クナラザル可カラズ、而シテ體育ハ焦眉ノ急トイフ可シ、當局者豈ニ之レガ匡濟ニ勤メズシテ可ナランヤ。

余幼時身體羸弱、精神憂鬱、常ニ藥石ニ親ム、以爲ラク、生キテ益ナキナリト、嘗テ某史ヲ讀ミ、盲者塙保巳一、天下ヲ周遊スルコト三年、宿痾愈ユルアルヲ見テ、大ニ感ズル所アリ、然レドモ當時尚ホ小學ニアリ、未ダ漫遊ヲ果ス能ハズ、故ニ遠ク二里餘ノ

片貝校ニ通學シ、祁寒暑雨、其難ニ耐ユ、幷年ニシテ藥石ヲ全廢スルヲ得タリ、因テ竊ニ其効ヲ識リ、閑アレバ則チ遊ブ、其遊ブヤ、必ズ徒歩ヲ期スト雖ドモ、疲勞スレバ惰心ヲ生ジ、遂ニ瀛船ニ乘ジ、瀛車ニ乘ジ、腕車ニ乘ジ、未ダ全ク其効ヲ成サザルナリ、嘗テ彌彦驛ニ遊ブ、彌彦山分明孤立、翠黛愛ス可シ、登攀ノ意頓ニ動ク、此山常陸ノ筑波山ニ比シテ、易ニシテ近、然レドモ初メテ登山スルヲ以テ、艱苦甚シ、又船車ノ勞苦ヲ醫スルナシ、一歩一喘、漸ク絶巓ニ達ス、北ノ方日本海中ニ在ル佐渡島ヲ下瞰シ、南ノ方蒲原ノ平原ヲ隔テ、岩代境界ノ連嶺ヲ望ム、風色ノ豪壯ナル復タ平地ノ觀ニ非ラズ、加フルニ萬難ヲ排シテ目的ヲ達セルノ快アリ、自ラ後樂ノ意ニ適ヒ、歡比ナシ、是ニ於テカ豁然大悟ス、以爲ラク、徒歩身軀ヲ强フシ、不屈不撓ノ精神ヲ練磨修養スルハ、登嶽ニ如クハナシ、今マ此ノ小山ニ登リテ尚ホ且ツ然リ、況ンヤ高峰峻嶺ニ於テヲヤト、爾後遠近ノ諸峰ニ登ル、其絶險ヲ冒ス毎ニ、益々快哉ト呼ブ、不知不識ノ間、剛健ノ氣ヲ生ジ、身體頑强、嘗昔ノ孱弱ナルニ肖ズ。

夫レ人大事ヲ成サント欲スレバ、則チ身神ヲ强健ニセザル可カラズ、身神ヲ强健ニセント欲スレバ、則チ剛健ノ氣ヲ養ハザル可カラズ、剛健ノ氣ヲ養ハント欲スレバ、則チ冒險セザル可カラズ、冒險ノ工夫ハ、登嶽ト渡海ニアリ、然レドモ、渡海ハ、船舶ノ具備、過大ノ費用ト、多數ノ日子ヲ要シ、容易ニ企圖ス可カラズ、獨リ登嶽ハ、數日ノ糧食ニシテ足ル、既ニ剛健ノ氣ヲ養ヘバ、以テ海ニス可ク、以テ山ニス可シ、選ブナキナリ、殊ニ我邦ハ、山嶽重疊シテ、富嶽ノ秀麗、阿蘇山ノ雄壯、俱ニ世界ニ冠絶ス、信飛

ノ境、歐人ノ所謂「日本あるぷす」ハ、山勢雄渾、溪谷幽邃、原人時代ノ景象ヲ現出シ、彼ノ國人ヲシテ稱賛措ク能ハザラシムルニ非ズヤ、其他地トシテ名山ノ突起セザルハナク、所トシテ大嶽ノ卓立セザルハナシ、蓋シ造物者ノ山嶽ヲ我邦ニ攢メシニ非ラザルナキカ、而シテ邦人ノ躋攀甚ダ稀ナリ、怪ムニ堪ユ可ケンヤ、想フニ德川氏鎖國ノ制ヲ立ツル三百年、邦人冒險ノ氣全ク消亡シ、登嶽渡海、其跡ヲ絕チシニ非ザルナキカ、然ラサレバ千七百年前、三韓ヲ征討セル神功皇后アリ、千二百年前、富嶽ニ登臨セル聖德太子アリ、上ノ好ム所、下之レヨリ甚ダシキハナシ、之ヲ外ニシテハ、五大洲中邦人ノ足跡ヲ印セザル所ナク、之ヲ內ニシテハ、各高山ノ絕巔ニ小祠ヲ建テシニ非ズヤ、此ノ如キ進取的國民ニシテ、何ゾ長ク保守シテ所謂「島國氣質」ノ名ヲ

甘受スルヲ得ンヤ、故ニ王政復古シテ鎖國ノ禁ヲ解クヤ、爵勃セル國民ノ意氣ハ、俄然併發シ、直ニ保守ヲ一變シテ冒險進取トナリ、大國民ノ氣風ヲ養ヒ、以テ宇宙ニ覇タラントス、當時誰カ冒險進取ノ不可ヲ唱ヘン、然レドモ德川氏因襲ノ久シキ、老者往々冒險ヲ否トシ、懦弱浮華ノ者、亦之ニ和ス、曰ク、危險ナリト、嗚呼此言是レ、德川氏ノ崩壞ヲ來タセルニ非ラズヤ、習フ可カラザルナリ、夫レ人誰レカ幸ト不幸トナカラン、幸者天神ノ守護スル者アルニ似タリ、既ニ幸者タリ、萬難ヲ冒シテ死セズ、既ニ不幸者タリ、家居自衛スト雖ドモ、疾病アリ、地震雷火アリ、又何ゾ逃カレンヤ、生死ハ唯天ノ命ズルニ任セヨ、人生ハ朝露ノ如シ、高樓錦繡ニ臥シ、優遊兒女子ノ手ニ死センカ、抑モ怒濤ニ擊タレテ鰐魚ヲ肥シ、深谿ニ墜リテ毒蛇ヲ飽カシメンカ、聞

ク歐洲瑞西國ハ、四圍皆山、攀躋者ノ死スル者、年々一千ヲ以テ數フ、巾幗者流、亦其中ニ居ル、而シテ英人最モ多シト、宜ナル哉、此冒險ノ氣アリ、故ニ既ニ宇宙ニ覇タルヲ得タリ、且ツ夫レ、横濱ニ英人、牧師うをるたーうえすとん氏アリ、北ノ方千島ヨリ、南ノ方臺灣ニ遊ビ、一萬尺内外ノ高峰、富士山・八ッケ嶽・御ゝ嶽・乘鞍ケ嶽・穂高山・鎗ケ嶽・常念ケ嶽・五六嶽・立山・大蓮華山・赤石山・白峰山・鳳凰山・甲州駒ケ嶽・信州駒ケ嶽ニ登リ、更ニ幾多無名ノ諸高峰ヲ極メントス、嗟、數千里ノ波濤ヲ冒シテ異邦ニ來リ、言語通ゼズ、風俗異ナルモ、尚ホ進ンデ止マザル此ノ如シ、敬慕ニ耐ヘザルナリ、(『日本山水論』ノ第八章、「日本の高山深谷を跋渉したる外國人及び其紀行」參照)顧レバ、邦人ノ遊歩ヲ好ムモノ、日光・松島・橋立・嚴島ノ俗境ニ至リ、遊惰酒色ニ耽リ、以テ天下ノ遊ヲ盡シ

タリトナシ、殊ニ知ラズ、高潔塵界ヲ脱出セル無名ノ高峰ハ、皆外人ノ先ンズル所トナリ、徒ニ豎子ヲシテ名ヲ成サシムルヲ、是亦一ノ國辱ニ非ラズヤ、戰敗ト異ナルナキナリ、余輩東洋ノ英人ヲ以テ任ズルモノ、徒ニ大和男兒ト誇稱シテ、歐米ノ婦人ニダモ之レ如カザルカ、大ニ鑒ミザル可ケンヤ、抑モ登嶽ノ効、獨リ剛健ノ氣ヲ養フノミナラズ、礦物・地質・動植物・氣象等、皆趣味アル考究ノ好材料タラザルハナク、兼テ文氣ヲ養フニ足ル、宋ノ蘇子由曰、太史公行天下、周覽四海名山大川、故其文疎蕩、頗有奇氣ト、願クバ世ノ志士・畫師・文人・官吏・商人、雅トナク、俗トナク、苟モ天下ニ雄飛活動セント欲スル者ハ、盛ニ登嶽シテ、以テ其身神ヲ强健ニセヨ。

余登嶽ニ志シテヨリ、每ニ其指導ニ供ス可キ好案内書ナク、豫

メ某山某溪ヲ略知シ、然ル後探險ニ從事スル能ハザルヲ歎ジ、彼ノ崢嶸巍峨タル群峰ト、原人時代ノ景象ヲ現出セル幽谿ノ知己ナキヲ憫ミタリ、蓋シ我邦、詩歌俳句・文章・地理・紀行ノ書、眞ニ汗牛充棟モ啻ナラズ、然レドモ深山幽谷ノ記事絕無ニシテ、其狀ヲ知ルニ由ナケレバナリ、後チ日本風景論・日本名勝地誌等ヲ始メトシ、各種ノ名勝記・案內記、陸續出版セラレタルモ、深山幽谷ノ記事ニ至リテハ、余未ダ慊焉タラザルナリ、當時年少、自ラ其力ヲ量ラズ、漫ニ山嶽・溪澗・河渠・湖沼・原野・瀑布・鑛泉・港灣・岬角・島嶼・海岸等ヲ詳述センコトヲ志シ、重キヲ山嶽・溪澗・河渠・湖沼・原野・瀑布・鑛泉ニ置キ、身親シク其地ヲ蹈ミ、其故老ニ質シ、以テ材料ヲ蒐輯セントセリ、既ニシテ祖父母ヲ喪ヒ、尋デ父翠松ヲ喪フ、故ヲ以テ漫遊ヲ中止セリ、(當時惡詩アリ、曰ク、嚮昔雄飛欲奇功、只今雌伏歎途窮、蹉跎況復老松折、絕意扶搖萬里風)爾來十年、群書ヲ涉獵シ、其山嶽・溪澗・河渠・湖沼・原野・瀑布・鑛泉ニ關スル者ハ、古書新刊、筆ニ任セテ摘錄シ、『山水私記』ト名ヅケ、一筐ニ藏セリ、中頃容易ノ業ニ非ラザルヲ覺リ、先ヅ山嶽ニ關セル者ヲ採錄シ、寸紙斷片、積ンデ一千三百山ニ及ブ、名ヅケテ『名山綱』トイフ、(參考書、詩文集トモ凡六千種、地圖凡二千葉ナリト雖ドモ、採錄セル所、漸ク一二句、或ハ某書ハ、某書ヲ引用轉載セル等ニテ、得ル所幾何モナカリシ)余又諸山ヲ跋履セリ、然レドモ、案內者ノ山中ニ宿スルヲ諾スルモノナク、且ツ　今上皇帝陛下ハ　神武天皇ノ再生ナリ、等若シクバ名所圖會的說明ノミニシテ、其行徒勞ニ屬シ、痛ク失望落膽セリ、偶々雜誌『文庫』ハ、登山文ヲ募集シ、(應募セシモノ一ノ伯耆大山紀行アリシノミ)讀

賣新聞社ハ、富士登山會ヲ催シテ、登嶽ノ氣風漸次盛ニ向フヲ知ル、而シテ其案内記・指南車タルモノニ至リテハ、寂寥故ノ如シ、是レ登嶽ヲ阻害スルモノニ非ラザルナキカ、余又自謂、獨行險阻ヲ跋履ス、勞多クシテ功少ナシ、寧ロ小册子ヲ刊シ、一方同好者ニ求メ、一方益々探險シテ、コレガ材料ヲ集輯スルノ勝レルニ如カズ、且ツ夫レ、大業ハ一人ノ能ス可キニ非ラズ、必ズヤ同好者ノ之レガ助ケヲナサヾルナシ、而シテ同好者ヲ得ント欲セバ、已レ先ヅ卒先其事ニ當ラザルベカラズト、即チ編スル所ノ『名山綱』ヨリ摘錄シ、題シテ『日本名山鈔』ト名ツケ、剞劂ニ付ス、蓋シ余ガ同好者ニ見ユルヲ、求ムルノ羔雉ノミ、(印行ノ際、『日本山嶽志』ト改稱セリ、此書ノ引用書ニ供セル者、詩歌・俳句・文集ヲ除キテ、僅々百幾種ナルニ過ギザルヲ見テモ、邦人ノ如何ニ

山嶽ニ冷淡ナルカヲ知ルニ足ラン、上野公園ノ帝國圖書館、藏書幾十萬、而シテ日本全國ニ亘レル、山嶽ニ關セル書籍ハ、谷文晁ノ『名山圖會』ト、吉田庫太郎氏ノ『大日本府縣志』中ナル、山嶽編ノミナリ、然レドモ『名山圖會』ハ、九十ノ山形ヲ摸寫セルニ止マリテ、其解說ナク、山嶽編ハ、其所在ヲ掲ゲシノミナリ、明治三十五年、富本時次郎氏ノ編纂出版セラレタル、『帝國地名大辭典』中ナル、山谷編ハ、菊判三欄、六號活字ヲ用ヒ、三百七十三頁アリ、掲載セル山數、凡五千二百ニシテ、其山嶽ヲ多數ニ列記セルハ、蓋シ空前トイフ可シ、然レドモ、是レ亦單ニ所在・標高ヲ掲ゲタルノミ、稀ニ達頂里數、山中ノ形容ヲ記シタレドモ、簡ニシテ趣味ナク、且ツ誤謬極メテ多シ、是レ余ガ非才ヲ顧ミズ、本書ヲ刊シ、郭隗トナリ、陳勝・吳廣トナリ、以テ樂毅ヲ得、劉季・項藉ヲ牽出シ

來ラントスル所以ナリ)余ガ祖父母外戚、皆七十餘ノ長壽ヲ保テリ、余モ亦攝生ニ注意セバ、馬齡豈ニ八十ニ及バザランヤ、余今年正ニ三十、餘ス所五十年、孜々汲々、愚公ガ山ヲ移スガ如クセバ、日本山嶽ノ大綱成リ、將來碩學ノ山誌編纂セラレン時、多少ノ參考トナランカ、世ノ同好者、明教ニ吝ナル勿レ、幸ニ諸子ノ援助ニ倚リ、此書ヲ大成スルヲ得バ、獨リ余ガ幸ノミニアラザルナリ。

方今人情輕薄、小康ニ安ンジ、驕奢華美ノ風、一世ヲ靡カス、過渡時代、已ムヲ得ザルノ勢ナリト雖ドモ、今ニシテ矯正セズンバ、危イ哉、而シテ海外諸國、我國長足ノ進歩ヲ妬視スルモノヽ如ク、殊ニ露國ハ惡感情ヲ抱キ、終始我國ノ妨害ヲナス、道路傳フル所、干戈相見ノ說、必ズシモ齊東野言ニ非ラズ、獨リ露國ノミニ非ラザルナリ、今ノ與國ト稱スルモノ、亦幾年ノ同好ヲ保センヤ、我國ノ盛衰興亡ハ、一ニ青年諸子ノ雙肩ニ在リテ存ス、而シテ諸子亦憔悴枯槁セントス、慨歎長大息スベキナリ、諸子夫レ奮起黽勉シ、暇アレハ則チ地質・動植物、其好ム所ヲ研究シ、盛ニ峻峰高嶽ニ躋攀シ、以テ剛健ノ氣ヲ激發シ、身軀ヲ頑强ニセヨ、此氣一度去レバ利器堅艦モ用ナキナリ、然リト雖ドモ、諸子夫レ歐米文物ノ燦爛タルニ眩惑心醉スル勿レ、此ノ如クンバ剛健ノ氣モ用ナキナリ、況ンヤ利器堅艦ヲヤ、諸子皆愛國心ニ富ム、是レ余ガ杞憂ノミ、諸子夫レ和魂洋才、故ヲ溫ネ新ヲ知リ、吏トナリ、儒トナリ、醫トナリ、農トナリ、工トナリ、商トナリ、以テ國益ヲ計リ、以テ風俗ヲ矯正シ、以テ國礎ヲ鞏固ニシ、而シテ一旦緩急アラバ、勇猛邁進、以テ　聖天子ニ奉ゼヨ、則チ諸子ノ任

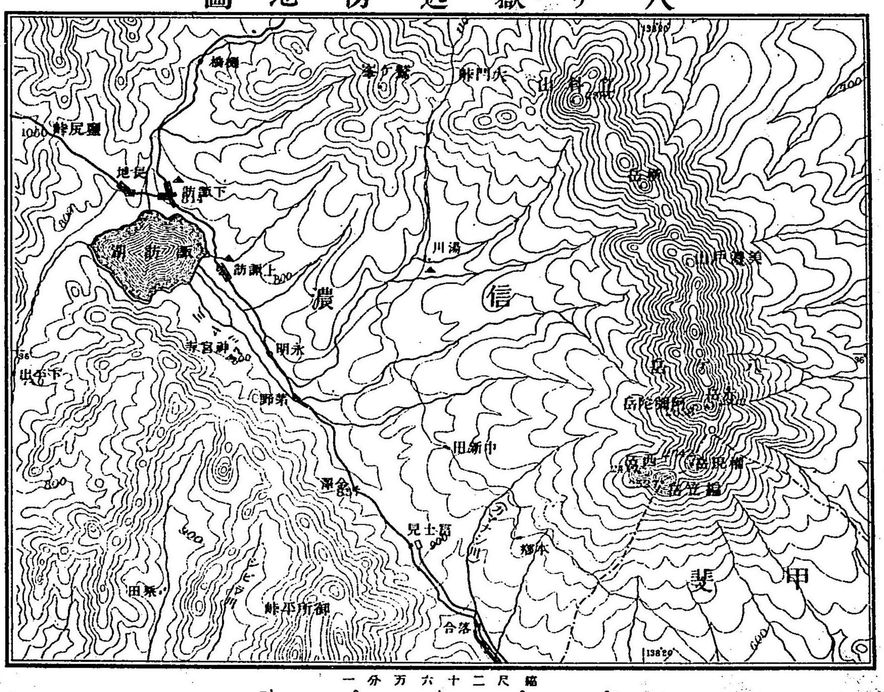
畢ル、聞ク露國　彼得大帝、遺訓スルニ世界併呑ヲ以テス、子孫遵奉、今ニ至リテ止マズト云フ、故ニ波蘭ヲ割キ、土耳古ヲ廢セリ、今又清韓ヲ攪乱シ、我國ヲ危クセントス、嗚呼露國ヲシテ志ヲ得セシメンカ、彼レ益々專横暴戾、虎狼ノ慾ヲ恣ニセン、而シテ深ク露國ヲ恨ム者ハ、皆切齒振腕シテ、之レガ復讎ニ急ナラントス、此ノ如クンバ、天下爭乱相次ギ、終ニ寧日ナカルベキナリ、是レ世界ヲ擧ゲテ禽獸ノ如クナラシムルナリ、而シテ之レガ野心ヲ制止セシメントスルモノ、一國ダニアルナシ、止ミナン哉、止ミナン哉、平和ノ望ム可カラザルヤ、我國元ヨリ戰ヲ好ム者ニ非ラザルナリ、不辜ノ民ヲ殺スニ忍ビザレバナリ、然リト雖ドモ、彼ノ露國ニシテ、南下我國ヲ壓服セントセンカ、我國豈ニ何ゾ膝ヲ彼レニ屈セン、國小ナリト雖ドモ、民少ナリト雖ドモ、擧國一致シテ、以テ彼レヲ破碎シ、彼ヲシテ野心ヲ放棄セシメン、而シテ吾ガ　聖天子ヲシテ、萬國ニ君臨セシメ、人種ノ黃白ト、東西ノ風俗トヲ問ハズ、長短取捨、其宜シキヲ得、仁惠博愛、八百六十億萬里、十六億萬人、渾然融化シテ以テ泰平ヲ謳歌セバ、奸人アリト雖ドモ、爲ス所ナク、兵器アリト雖ドモ、用フル所ナシ、是レ豈ニ眞ノ樂土ニ非ズヤ、人道是ニ於テカ全ク、天ノ人類ヲ生ゼル所以ノモノ是ニ於テカ盡セリトイフ可シ、露國ノ興國或ハ言ハン、露衰ヘテ、日興ル、暴ヲ以テ暴ニ易フ、撰ブ所ヲ見ズ、況ンヤ白人、何ゾ黃人ノ下風ニ立タンヤト、噫、是レ何ノ言ゾヤ、黃禍トイフモ白禍アリ、白禍トイフモ黃禍アルニアラズヤ、黃人白人、各々特色アリ、何ゾ獨リ白トイヒ、黃トイフヲ用ヒシ、若シ夫レ白人ヲ文明ナリトシ、黃人ヲ非文明ナリト言ハ

ヾ、余將ニ大ニ論ズル所アラントス、我國嘗テ韓國ヲ援ケテ清國ト戰ヒ、其悔悟和ヲ請フニ至ルヤ、清國山東・盛京ノ二省ヲ割愛セリ、我國地ヲ欲スルニ非ラザルナリ、露國ニ備ヘンガ爲ノミ、然ルニ露國ハ巧言ヲ弄シテ、某々二國ヲ誘ヒ、口ニ東洋ノ平和ニ害アリト唱ヘ、心自ラ之レヲ得ントシ、二省ヲ還附センコトヲ忠告セリ、我國元ヨリ平和ヲ希フモノナリ、故ニ速ニ清國ニ還附セリ、豈ニ至誠ノ友誼ニ非ラズヤ、今ノ露國ノナス所ノモノハ、果シテ東洋ノ平和ニ利アルモノトスルカ、某々二國何ゾ露國ニ忠告セザルヤ、此ノ如ク諦盟國ヲ詐リ、以テ平和ヲ乱リ、而シテ尚ホ文明ト稱スルヲ得ルカ、然ラバ則チ我大日本帝國ハ、以テ文明ナリト稱スルヲ得可キカ、曰ク未ダシ、故ニ曰ク、東西提携シ、誠意正心、互ニ短所ヲ補ヒ、以テ眞ノ文明ニ進マザル可カラズト、人種論ノ如キハ僻見ノミ、辯ゼズシテ可ナリ、於戲、太陽ノ赫々タル萬物皆其惠ニ浴ス、我帝國「大日本」ト號シ、旗章旭日ヲ用フ、是レ豈ニ、天ノ冥々裏ニ大司命ヲ下セルモノニ非ラザルナキカ、果シテ然ラバ則チ文明ノ、曙光ハ、我大日本帝國ニヨリテ發揚セラレ、萬國ノ蒼生ハ因テ以テ長ク含哺而熙、皷腹而遊ブヲ得ベキヤ必セリ、此時ニ當リテ、吾ガ同好者ハ、均シク餘勇ヲ皷シテ、人跡未ダ到ラザル「ひまらや」ノ最高巔ニ踞シ、以テ天地ヲ小トセン、豈ニ曠世ノ快事ニ非ラズヤ、而シテ余ガ編纂ノ意、コヽニ至リテ盡ク、昔シ枯骨ヲ五百金ニ買フ者アリ、此書豈ニ一顧ノ値ナカランヤ。

明治三十六年十二月二十五日夜

北越　高頭式

八ヶ嶽近傍地圖

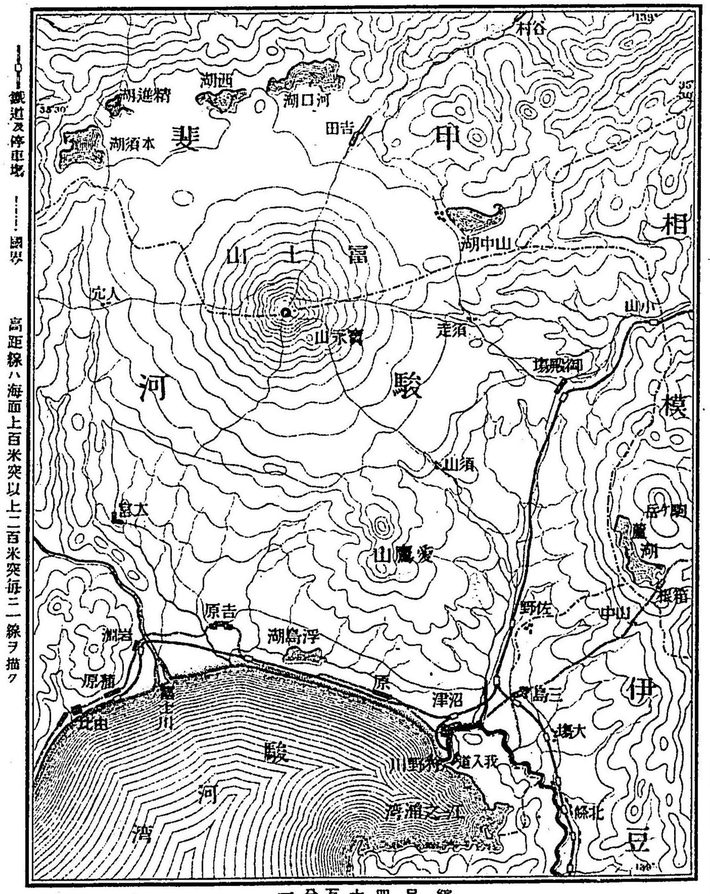


縮尺二十六万分一

□ 鐵道及停車場　|||| 國界　・ 山頂　▲ 温泉　高距線ハ海面上二百米突毎ニ一線ヲ畫ク

第二版

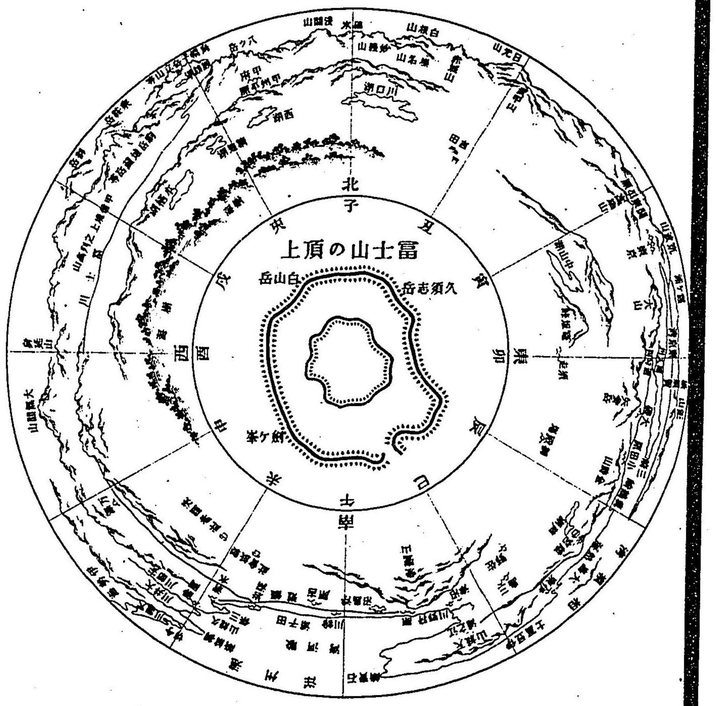
富士山近傍地圖


村谷
139°
35°30′
湖西
湖進精
湖口河
田吉
湖須本
斐
甲
相
湖中山
富士山
宮下
山小
走須
塩殿御
駿
河
模
山須
太島
山鷹愛
蘆湖
原吉
湖島浮
野佐
中山
伊
原
澤沼
島三
塩大
川野林
道入我
北條
豆
湾
駿河湾之江
139°
縮尺四十万分一
里 0 1 2 3 里
鐵道及停車場
國界
高距線ハ海面上百米突以上二百米突毎ニ一線ヲ描ク

第三版

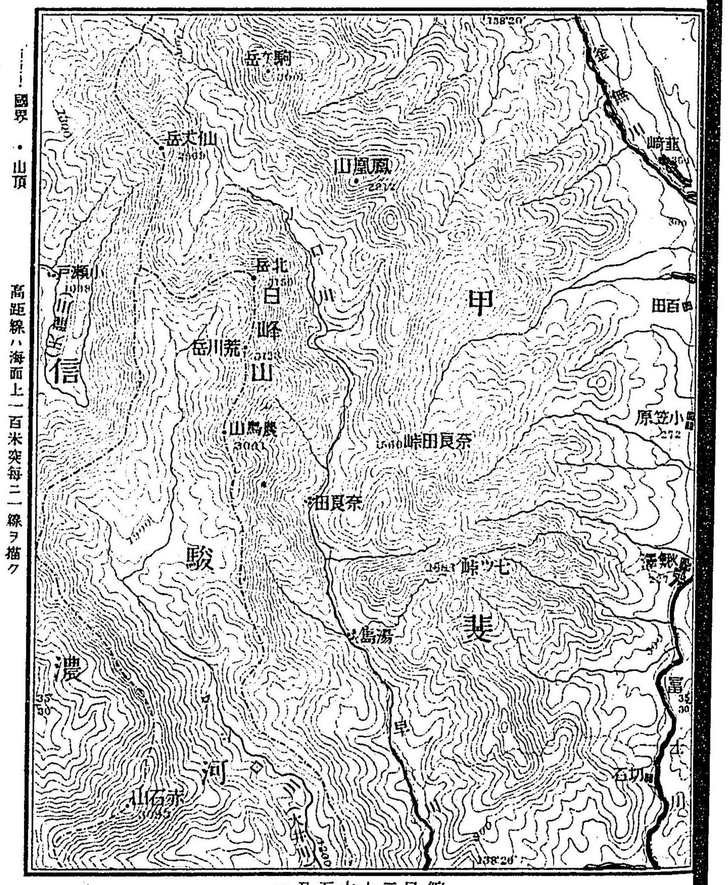
富士山頂大觀之圖

野中到氏創案



第四版

白峰山赤石山近傍地圖

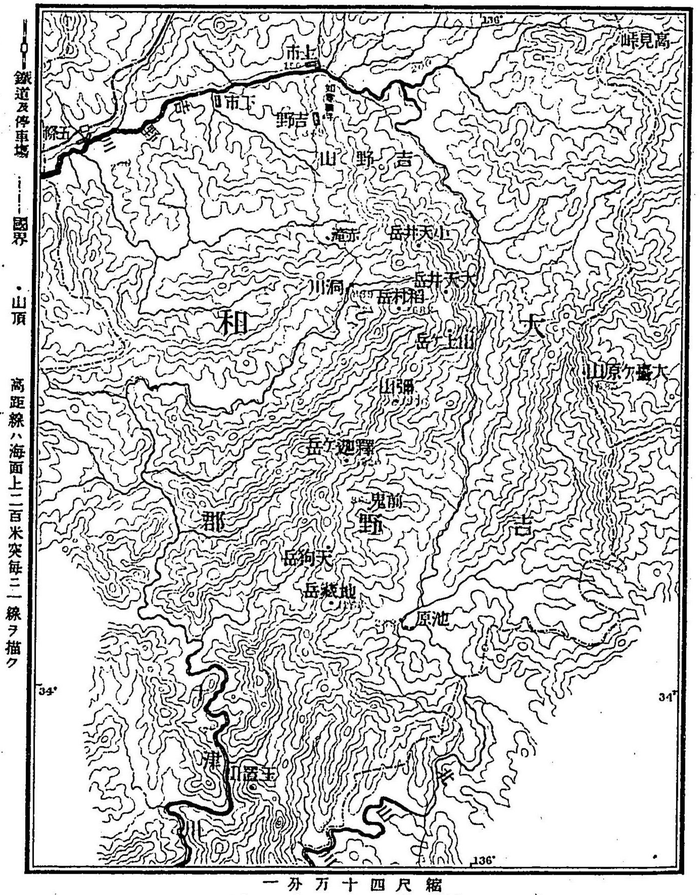


縮尺二十六万分一

1 0 1 2里

第五版

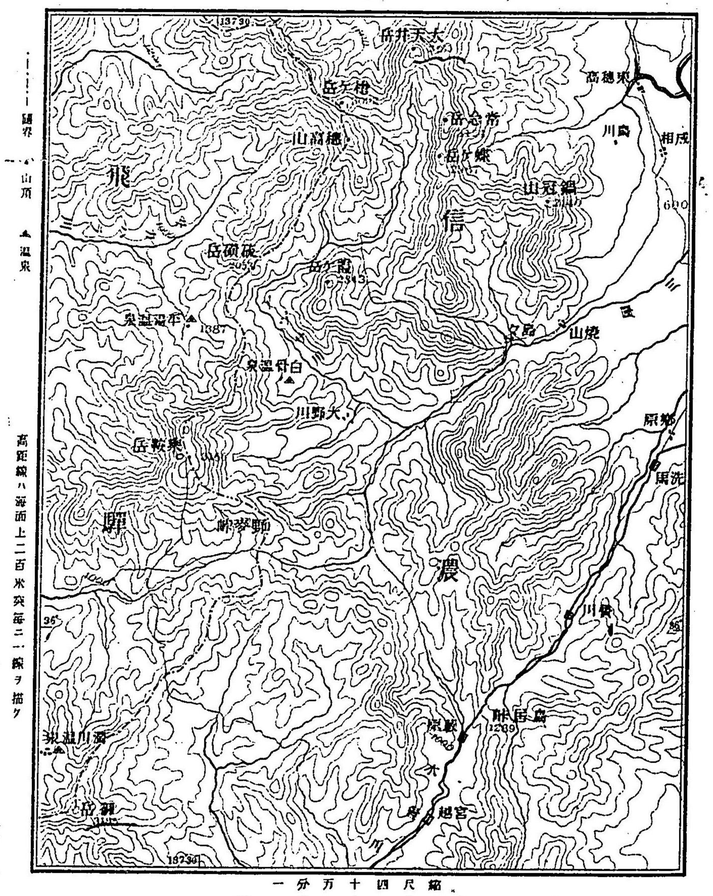
吉野群峰



縮尺四十万分一

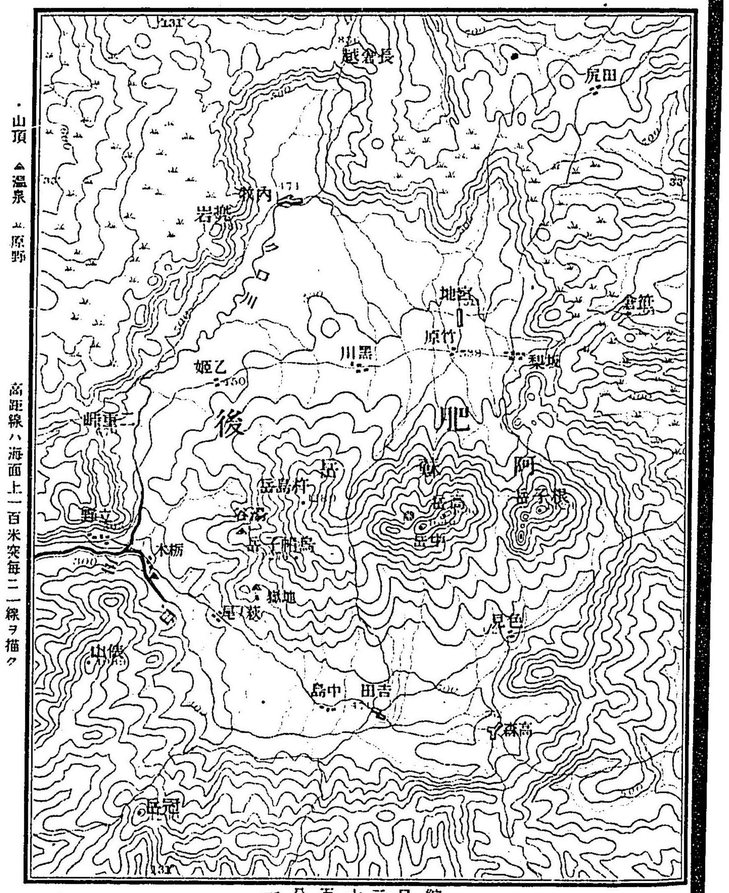
第六版

鎗ヶ嶽,乘鞍嶽,御嶽近傍地圖



第七版

阿蘇山地圖



縮尺二十万分一

里 0 1 2 里

凡例

一登山者及ビ讀者ニ對シテ編纂者ノ希望　本書ハ之レニヨリテ我國山嶽ノ世ニ紹介セラレンコトヲ期シ、世上旅行者ガ單ニ名勝舊蹟ヲ歴訪スルニ止マラズ、盛ニ峻峰高嶽ニ登攀センコトヲ希ヒ、且ツ其山勢・周圍・登路即チ達頂里程・眺望・溪澗・瀑布ノ狀態・宿所飲用水ノ有無・樹林草木ノ疎密・文章詩歌俳句・俚說俗傳・繪畫寫眞等ヨリ、專攻家ニアリテハ更ニ動植物・氣象・地質ニ至ル迄、成ル可ク精細ニ詳記シ、仁惠的厚意ヲ以テ、之レヲ編纂者ニ投與セラレンコトヲ切望シ懇請スルガ爲メ、普ク同志同好ノ士ニ對シ通則的ニ編纂刊行セルモノナリ、蓋シ本邦尙ホ此類ノ著作ニ匱シキヲ以テ、脫漏誤謬亦固ヨリ少ナカラザルベシ、大方讀者希クハ之ヲ指示シ、編纂者ヲシテ漸次本書ヲ訂正完成スルコトヲ得セシメンコトヲ。

一編纂ノ躰ヲ採レル所以　今日材料ニ乏シクシテ、到底豫想ノ著述ヲナス能ハズ、旁搜シテ得タル些少ノ材料ニ據リ、ヨク之ヲ綜合シ裁斷セント欲セバ、勢、臆說ヲ雜ヘザル可カラズ、本書ハ其出處根原ヲ嚴明ニセント欲シ、故ニ編纂ノ躰ヲ採レリ、是レ其確實ナルモノト然ラザルモノトヲ知ルノ便アレバナリ、例ヘバ「山嶽表」ヲ撿シテ、越後山系、飯豐山塊中、鳳倉山・烏帽子嶽

ノ登路及ビ其里數ハ、日本地誌提要ニ採レルヲ以テ、比較的確實ナル可ク、二王子嶽・菱嶽ハ帝國地名辭典ニ據レルヲ以テ、疑ハシキヲ知ルガ如キ等コレナリ、其狗尾ヲ貂ニ續グガ如キハ、固トニ止ムヲ得ザルナリ。

一本書ノ大別及ビ其説明 本書ハ之ヲ分チテ、索引、登山術、山嶽諸説、日本地質構造概論、山嶽各記即チ本編、山嶽噴火年表、山嶽表ノ七編トス。

索引 國分、稱呼、字畫ニ三別セリ、國分索引ハ其所屬國ニヨリテ索ムルモノニシテ、例ヘバ駿河國竹取山、又ハ甲斐國竹取山ヲ知ラント欲セバ、駿河國若クバ甲斐國ヲ見テ、其同ジク富士山ノ別稱タルヲ知ルガ如キ等コレナリ、稱呼索引(所謂假名索引)ハ稱呼ニヨリテ索ムルモノニシテ、例ヘバ富士山(フジサン)ヲフ部ノ頁數ニヨリテ、之ヲ得ルガ如キ等コレナリ、字畫索引(所謂漢字索引)ハ字畫ニヨテリ索ムルモノニシテ、富士山ヲ富字十二畫ニ索ムルガ如キ等コレナリ。

登山術 高山探險ニ關スル總テノ準備注意ヲ記セリ。

山嶽諸説 專門家諸氏ノ山嶽ニ關セル諸説ヲ掲ゲタリ、但タ中途ヨリ增補ニ忙殺セラレ、尙ホ他ノ諸氏ヲ訪問シテ其説ヲ請フノ暇ナク、僅々數編ニ過ギザリシハ、遺憾トスルトコロナリ。

日本地質構造概論 原田理學博士、小川理學士兩氏ノ日本地質構造論ノ概略ヲ載セタリ。

山嶽各記 即チ本書ノ主體ニシテ、各山嶽ノ別稱、(必ズシモ別稱ニ限ラズ、文字ノ異ナルモノモ、多ク之レヲ掲載セリ、而シテ頭文字ノ異ナルモノハ採錄シ、末文字ノ異ナルモノハ省略セリ、例ヘバ富士山ノ別稱ニ、不二山・布士山等ヲ掲ゲ、富士嶽・富士峰・富士嶺等ヲ擧ゲザルガ如キ等コレナリ、但シ玄嶽(クロミヤ)ノ別稱ニ、玄峰(クロミネ)アルガ如キ等ノ異例アリ)所在、登路、標高、(登路及ビ標高ノ説明ハ、次項ノ山嶽表ニアリ)山容及ビ之ニ關スル一切ノ事項ヲ、知リ得タル限リ引用説明シ、文章詩歌俳句ヲ副載セリ、又タ里俗傳フル所ノ話説ニシテ、荒唐無稽ナルモノモ、里俗ガ幾許其山嶽ヲ尊崇シ、且ツ威靈ヲ添ヘント欲スルニ切ナルカヲ察スルヲ得ベキヲ以テ猥褻ニ流ルヽモノヽ外、悉ク採錄セリ。

山嶽噴火年表 各火山ノ噴火年表ナリ、初メ山嶽ノ史籍ニ散見スルモノ、「帝葛城山ニ狩ス」「空海高野山ヲ開ク」等、山嶽ニ關セル事蹟ヲ蒐集シテ、「山嶽事蹟年表」ヲ編セント欲セシモ、短時日ノヨクス可キニアラザルヲ以テ、本表ニ代ヘタリ、本表ハ、主トシテ日本災異志・大日本府縣志二書ノ噴火年表、及ビ震災豫防調査會報告・地學雜誌ヲ參照シテ製作セルモノナリ。

山嶽表 標高及ビ標高憑據圖書名、登路憑據圖書名、地質ニ三別セリ、標高ハ最詳最新ナル圖書ニ據リ、其最高點ヲ記セリ、而シテ本編即チ山嶽各記印刷ノ後、地形圖ノ新發刊アリタルモノ

ハ、謬ルニ隨テ訂正記載セリ、故ニ本編ト相違セルモノハ、本表ヲ正シキモノト知ルベシ、登路（登山口及ビ達頂里數）ハ明記セル書籍極メテ少ナキヲ以テ、多ク地誌提要ニ據リ、其疑ハシキ書籍ニ記セルモノモ、亦悉ク網羅摘錄セリ、地質ハ農商務省地質調査所刊行ノ二十萬分一地質詳圖ニ據リ、其未刊行ノ分ハ同所刊行ノ四十萬分一豫察地質圖ニ據レリ、故ニ表中地質ト豫察地質ニ別チタリ、但シ北海道、豆南諸國、琉球諸島ノミハ地質詳圖、豫察地質圖ノ刊行ナキヲ以テ、同所刊行ノ百萬分一地質圖ニ據ル、左表鳥海火山群中

標高山嶽名	標高憑據圖書名	登路憑據圖書名	地質
高尾山（〇二）976	ノ二	統計	輝石安山
神宮寺嶽（五三）828	ノ四	同	同
保呂羽山（同）495	同	提要	—
鷲座山 303	—	名勝	火山岩
金峰山 303	—	同	—（第三紀層）

トアルハ例ヘバ高尾山標高條下「976」ハ、三百七十六米突ナルヲ示シ、同「（〇二）」ハ標高憑據圖書ノ刊行、明治二十年ナルヲ示シ、標高憑據圖書名條下ノ「ノ二」ハ農商務省地質調査所刊行

二十萬分一圖ニ據レルモノナルヲ示シ、登路憑據圖書名條下ノ「統計」ハ、其所屬縣ノ統計書ニ據レルヲ示シ、地質條下「輝石安山」ハ構成地質ノ輝石安山岩ナルヲ示ス、又鷲座山標高條下……303……地質條下（　）ハ此山ノ未ダ同所ノ地圖ニ記載セラレザルモ、同圖及ビ統計書ニ據リテ、余ガ概略豫想セシモノナルヲ示セルナリ、要スルニ此表中標高條下……符ヲ用ヒ、地質條下（　）符ヲ用ヒシモノハ、其標高及ビ地質ノ分明ナラザルモノト知ルベシ。

圖書名略號ハ凡例末條ノ引用書名略號ヲ見テ知ルベク、地質略號ハ卷尾ノ山嶽表ヲ見テ知ルベシ。

附言、本書山嶽各記即チ本編ニハ、日本尺（一米突ヲ三尺三寸ト見ル）ヲ以テ標高單位トナセリ、是レ余ガ山嶽崇拜ノ極、世俗ヲシテ幾多カ雄偉壯大ノ感觀アラシメント勉メタレバナリ。

一本書ノ山嶽區劃　山系・火山帶ニ分劃シ、敢テ道・國・郡ノ地劃ニ據ラズ、故ニ若シ道・國・郡ニヨリテ、某山某嶽ヲ索メント欲セバ、則チ前記國分索引ニ就テ之ヲ看ル可シ、山嶽ノ區劃ハ、始メ漫然樺太・崑崙ノ二大山系及ビ富士火山脈ニ分チ、更ニ左ノ如ク小別セリ。

樺太山系（北樺山系）
1 蝦夷山脈　2 北上山脈　3 阿武隈山脈
4 關東山脈　5 千島火山脈　6 中央火山脈
7 出羽火山脈　8 越後山脈

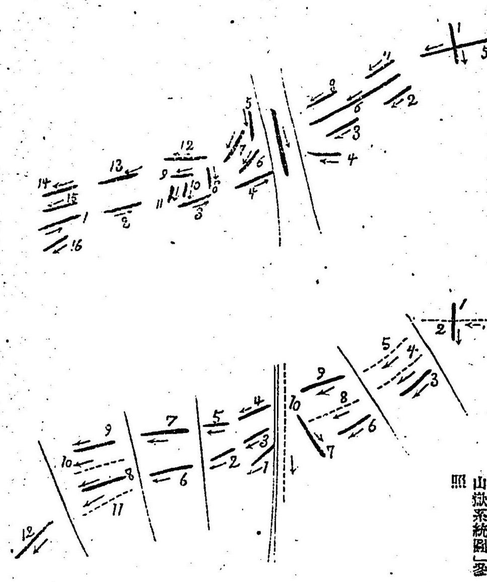
崑崙山系（南樺山系 支那山系）

1 九州中央部山脈　2 四國山脈　3 紀伊山脈　4 赤石山脈　5 飛驒山脈
6 濃飛高原　7 木曾山脈　8 鈴鹿山脈　9 笠置山脈　10 葛城山脈
11 和泉山脈　12 丹波高原　13 中國山脈　14 筑紫山脈　15 九州北部山脈
16 九州南部山脈

富士帶火山脈

即チ樺太山系ハ樺太島ニ起リ、北海道ヨリ本州ニ入リ、崑崙山系ニ會ス、崑崙山系ハ支那大陸ノ餘波ニシテ、九州ヨリ四國ヲ經テ本州ヲ走リ、樺太山系ト會ス、此二山系ノ會スル所ニ、富士帶火山脈ノ大噴出アリトナシ、一昨年末ニ脫稿シ、昨年正月印刷ニ着手セントセシガ、偶々小川理學士ノ敎ニヨリ、精密ニ系統的分割ヲナスコトヲ得タリ、即チ北日本・南日本ニ分チ、北海道・奧羽・關東及北越・本州中部・四國及中國・九州・臺灣ニ大別シ、猶ホ山系・火山帶ニ分チ、更ニ山塊・火山群ニ小別セリ、故ニ原稿全部八百葉ヲ改正變更セリ、即チ山脈區劃ハ地質構造ニヨリ、古期地躰ト火山地方ヲ嚴密ニ分割シ、古期岩層ニ屬スルモノハ、山系及ビ山脈ト名ヅケ、斷層等ニテ短截セラレタルモノハ山塊ト呼ブ、火山地方ハ長ク連ナレルモノヲ火山帶ト名ヅケ、其一部ヲ火山群ト呼ベリ、然レドモ古期地躰ニ在ル火山ノ小部分、及ビ火山地方ニアル古期ノ

小部分ハ、古期又ハ火山ニ混同セリ、例ヘバ北上山系中、名久井嶽ノ火山岩アリ、那須火山帶中、仙翁嶽ノ片麻岩アルガ如キ等コレナリ、今山嶽系統分割前後ノ二圖ヲ對照ス。



別圖「日本群島山嶽系統圖」參照

一所載山嶽ノ標準　本書所載ノ山嶽ハ、初メ登路十四町以上アリト稱セラルヽモノ、及ビ地圖・地誌ニヨリテ登攀スルヲ得ルト信ゼルモノヽ外ハ、掲載セザリシガ、後チ登路十四町以下ナルモ、著名ナルモノ即チ山城ノ笠置山、讃岐ノ飯ノ山等ノ如キモノハ、多ク採錄セリ、但シ臺灣ノ雪山ハ未タ登躡セシ者ナシト

雖ドモ、此ノ如キ最高山ヲ放棄スルニ忍ビザルヲ以テ、例外トシテ掲載セリ。

一山嶽及ビ郡村名稱呼傍音傍訓法　正確ナリト想ハル、書籍ニヨリタルモノ、其所屬町村役場ニ照會シタルモノ、及ビ實地踏査ニカヽルモノハ、片假名傍音傍訓ヲ用ヒ、其疑ハシキモノハ平假名ヲ用ヒ、其據ルベキモノナキモノハ傍音傍訓ヲ避ケ、決シテ自己ノ臆測ヲ以テ之ヲ爲サズ、是レ荻城山角田山的傍訓ニ流レ、(二山、余ガ鄉里ノ近傍ニアリ、「オギノジヤウヤマ」「カクダヤマ」ト呼ブ、然ルニ某書ニ上記ノ如ク傍訓セリ)人ヲ誤マルヲ戒レタレバナリ、正確ナリト想ハル、書籍トハ日本地誌提要・市町村一覽・郡區町村一覽・日本地學辭書ニシテ、山嶽名ハ日本地誌提要・日本地學辭書ニ據リ、郡町村名ハ市町村一覽ニ據リ、大字名ハ日本地誌提要・郡區市町村一覽ニ據レリ。

一引用文及ビ符號ノ說明　本書ノ引用文ハ原文ノ儘(片假名・平假名・漢文)掲載セリト雖ドモ、活字本ニハ誤植、古印本ニハ磨滅、寫本ニハ誤寫アリテ、文意通ゼザル處ハ、多少ノ挿入刪減ヲ加ヘタリ、例ヘバ活字本駒嶽(甲國)(二百十二頁)ノ原文至ラザル所ナクヲ、アリト改メタルガ如キ等コレナリ。

引用文中、文中ノ[符ハ中略若シクハ段落ニシテ、文末ノ] 符ハ文章詩歌俳句ノ原本中ニ存在

セザルヲ示セリ、而シテ「 」符ヲ用ヒシモノハ、余ノ實驗及ビ自說ナルヲ示セリ。

引用文中ノ地名・山嶽名ノ連記セラレタルモノニシテ、伊賀伊勢尾張ノ如キ明瞭ナルモノハ、一々截點(、)ヲ用ヒテ之ヲ分チタルモ、其不明ナルモノハ、漫リニ臆測ヲ以テ截點ヲ施サズ。

一挿入文章詩歌俳句　本書ハ主トシテ未ダ著名ナラザルノ山嶽ヲ紹介スルニ勉メタルヲ以テ、著名ナルモノヽ、文章詩歌俳句ハ多ク之ヲ省略シ、著名ナラザルモノニ關セルモノハ、拙劣ナルモノト雖ドモ悉ク採錄セリ、故ニ玉石同匱タルヲ免レズ。

文章詩歌ノ作者名ヲ寫脫セルモノ、例ヘバ越後ノ妙高山登攀記ノ如キモノハ、已ムヲ得ズ逸名ト書シテ掲載セリ、コヽニ其疎漏ヲ謝ス。

一增補　本書ノ本編即チ山嶽各記ニ掲載セル山嶽數ハ、最初千三百山ニシテ、印刷既ニ立科山(百七十六頁)ニ及ビシガ、偶々各府縣ノ統計書ニヨリテ、多クノ遺脫アルヲ知レリ、(各府縣ノ統計書ハ、曾テ北海道・岩手等ノ二三ヲ通覽セシモ、別ニ探ルヘキモノ之レ無シトナシ、復タ他ニ及バザリシガ、後チ田中阿歌麻呂氏ノ注意ニヨリ、福島縣以下大ニ得ル所アリタリ、氏ノ厚意ヲ謝シ、併セテ余ガ疎漏ヲ謝ス)乃チ校正ノ傍ラ極力增補シテ、其數實ニ八百十有餘山ヲ採錄セリ、因テ補遺ノ一編ヲ設ケ、其遺脫セルモノ、及ビ既錄セルモノニシテ未ダ盡サヾル所ヲ、複記增

補シテ、編末ニ附スルコトヽセリ、遺脱山嶽中鞍馬山(此山ノ登路ハ日本地誌提要ニ、鞍馬村ヨリ九町餘トアリタレバ、主編〔補遺ニ對シテ主編トイフ〕ニ採錄セザリシガ、京都府統計書ニハ同所ヨリ十四町トアリタルヲ以テ、掲載セリ)ノ如キハ、其說文及ビ多々ノ詩歌傳說等ヲ錄シ、既ニ余ガ名山綱稿ニ收メアリシモ、本書編纂抄錄ノトキ原稿ノ散亂混雜シ、且ツ二萬分一圖、五萬分一圖トモニ鄕里ニ遺留セルヲ以テ、參照スルノ餘暇ヲ得ザリシハ、深ク遺憾トスルトコロナリ、他日ヲ待テ訂正スルトコロアルベシ。

一誤謬脫漏　本書ハ經營多歲熟心ニ編纂セルモノナルヲ以テ、比較的精確ナルモノト信ズレドモ、誤謬脫漏ナキヲ保セズ、蓋シ精確ナリト稱セラルヽ書籍モ亦往々誤謬アルヲ免カレズ、其一例ヲ擧グレバ舊和泉橋警察署編纂ノ市町村一覽ヲ校訂增補シテ、一年半ヲ經テ成レル市町村一覽(丸善株式會社出版)ノ如キ精密正確、海內無双ト稱スモ、而カモ、兵庫縣氷上郡柏原(カヒハラ)町ヲカしはばらト訓ジ、我邦第一ノ最新最詳ノ好地理書ナル大日本地誌(博文館出版)ノ如キモ、其第三卷(中部)甲斐國ノ條百五頁ニ、「駒ヶ嶽・鳳凰山・地藏嶽等の諸峰を隆起せり。駒ヶ嶽は即ち群中の最高峰にして、仙丈嶽の東北に聳え、北巨摩郡に屬す。海拔三千一米、東北釜無川の溪谷を隔てゝ八ヶ嶽火山と對峙し、其の高峻を競ふものゝ如し。鳳凰山は駒ヶ嶽の東南に在り

て北巨摩・中巨摩の兩郡に跨り、高さ二千九百十二米。地藏嶽は之れに接して其の南に聳ゆ。又駒ヶ嶽の北方には鞍掛山(千四百八十三米)の小隆起あり。是れ等の諸峰何れも山勢巍峨として高く天に聳え、登路絕えてなく、殆んど登臨するを得ず。」ト記シ、又同書長野縣ノ條九百四十三頁ニ「就中駒ヶ嶽の如きは其最たるものなり。駒ヶ嶽は伊那の東方に屹立し、高さ三千二米、磊塊盤紆俗に三十六峰八千溪と稱し、本縣屈指の高峰にして七八月の候其山隈猶越年の雪を望み、背汗喘々水に渴するの旅人をして、歩を止めて思はず快哉を絕呼せしむ、頂上の神社を駒ヶ嶽神社と云ふ。盛夏遠近の賽者登攀を企つるもの少なからず白雲脚下に起りて尙冷凉を覺ゆ。」ト記セルモ駒ヶ嶽・鳳凰山・地藏嶽等皆立派ナル登山路アリ、就中駒ヶ嶽ハ年々登攀スル者、甲州口ノミニテモ二千五百人以上アリトイフ、余モ今年八月二十日甲州街道ノ臺ヶ原村ヲ發シテ此山ニ登レリ、其日屏風岩下ノ小舍(二千百五十米突ノ所ニアリ)ニ宿ス、二十一日六時二十五分微雨ヲ冒シテ蹐攀シ、九時二十五分三千一米突ノ絕巔ニ立テリ、登路險峻、鐵鎖ヲ五ヶ所ニ繫ギ、登蹐ノ困難ナルコト、富士山・八ヶ嶽ノ比ニアラズ、然レドモ吾ガ鄕八海山ノ險絕ナルニ如カザルガ如シ、其案內記ハ本書駒ヶ嶽(二百十一頁)ノ條《小島氏增補》ニ詳ナリ、鳳凰山・地藏嶽ノ登路モ本書二百十四頁及ビ二百十六頁ニアリ、就テ見ル可シ、又長野縣條下ノ

駒ケ嶽ノ記事ノ如キハ、甲州駒ケ嶽ト信州駒ケ嶽ヲ混同合併シタルモノニシテ、誤謬ノ酷ダシキモノトイフ可シ、尙ホ詳細ヲ知ラント欲セバ、雜誌文庫第二十八卷第五號ノ「大日本地誌第三卷を續む」ヲ見ル可シ、其他日本・地誌提要日本地學辭書・郡區町村一覽等亦皆多少ノ誤謬アリ、噫、曠世ノ學識ト巨大ノ費用トヲ以テスルモ、其誤謬ヲ免レザル此ノ如シ、況ヤ遙遙余ガ如キ者ヲヤ、是レ世ノ高教ヲ仰グニ切ナル所以ナリ。

一特ニ讀者ノ注意ヲ請フ　本書本編ノ說文中、最モ確實ナルモノハ《摘譯》(志賀氏ノ譯讀セラレタルヲ筆記シテ、余ガ書キ綴リタルモノナレバ、文詞ノ拙劣ナルハ余ノ罪ナリ)ト《小島氏增補》ナリ、小島氏ノ增補ハ、其案內記トシテ殆ンド誤謬遺漏ナキモノト信ズ、就中赤石山ノ記事ノ如キハ、最新最詳最密ニシテ、日本國中他ニ見ル能ハザルモノナリ、故ニ此二者ハ特ニ精讀アランコトヲ請フ、尙ホ日本風景論(志賀重昂氏著、全一冊、正價九十錢、博文館發行)日本山水論(小島烏水氏著、全一冊、定價壹圓參拾錢、隆文館發行)日本名勝地誌(野崎左文外數氏著、全十二冊、全部金參圓二十錢、博文館發行)大日本地誌(山崎直方氏佐藤傳藏氏共編、全十冊、一冊正價貳圓五十錢、博文館發行、目下第一卷關東、第二卷奥羽、第三卷中部ノ三冊、出版セラレタリ)ノ四書ハ、登山者・旅行者ノ好參考書タルヲ信ズ、故ニ本書ト併看シ以テ本書ノ盡サヾル所ヲ補ハレタシ。

增補ノ際、各府縣ノ統計書ヨリ得タル、登山口及ビ達頂里程ノ相違セルモノヲ、悉ク複記スル能ハザリシハ、深ク遺憾トスルトコロナリ、大方讀者若シ一々之ヲ知ラント欲シ、又ハ本書ニ關シテ疑問アラバ、照會アリタシ、余ハ喜ンデ之ニ應ゼン。

因テ言フ、余ガ家ハ、越後平原ノ北々東ニ向ツテ開展セント欲スルノ處、三島郡深才村大字深澤ニアリ、來迎寺停車場ヲ距ルコト北ノ方約十二町。

一本書附圖　初メ日本登山地圖ナルモノヲ編成シ、某山某嶽ニ至ル道程里數、市邑村落ノ所在ヨリ、鐵道・電車・馬車・舟・車ノ如キ、交通機關ノ設備等ヲモ詳記シテ、登山者ノ好示掌ニ供センコトヲ期セシガ、遺憾ナガラ未ダ完成ニ至ラザルヲ以テ、他日別冊トシテ刊行セントス。

一謹謝　本書編纂ニ關シ光彩ヲ添ヘラレタル各位ニ對シ、及ビ特ニ多大ノ助力ヲ與ヘラレタル左ノ諸氏ニ對シ、謹デ謝意ヲ表ス。

巨智部忠承氏　氏ハ農商務省地質調査所所藏圖書閲覽ノ便宜ヲ與ヘラレタリ。

小川琢治氏　氏ハ山嶽系統分劃ヲ敎示セラレ、其他有益ナル注意ヲ與ヘラレタリ。

井上禧之助氏　氏ハ其撮影ニカヽルあるぷす山ノ寫眞ヲ供給セラレタリ。

志賀重昂氏　氏ハ特ニ厚意ヲ以テ二週日間ニ亘リ「はんどぶつく、ふちあ、じやぱん」譯讀ノ

勞ヲ與ヘラレタリ。

田中阿歌麻呂氏　氏ハ其所藏寫眞ヲ供給セラレタリ。

石川成章氏　氏ハ有益ナル助言注意ヲ與ヘラレタリ。

小島烏水氏　氏ハ劇務中ニモ係ハラズ、精確ナル增補ノ勞ヲ與ヘラレ、且ツ其所藏寫眞其他有益ナル材料ヲ供給セラレタリ、氏ノ增補ト志賀氏ノ譯讀トハ、本書ニ多大ノ光彩ヲ添ヘタリ。

大平晟氏　氏ハ其旅行セラレタル紀行ヲ供給セラレタリ。

佐々木信堅氏　氏ハ特ニ厚意ヲ以テ製圖ノ勞ヲ執ラレタリ。

大澤十二郎氏　氏ハ本書挿入ノ第一圖及ビ木版畫悉皆ノ縮寫製作ニ關シ、特ニ厚意ヲ以テ揮洒ノ勞ヲ執ラレタリ。

大橋新太郎氏　氏ハ有益ナル諸材料ヲ供給セラレ、且ツ本書發刊ノ爲メ特ニ厚意ヲ以テ諸般ノ便宜ヲ與ヘラレタリ。

一挿入圖表　本書挿入圖畫ハ總テ百六十三圖、今其圖種、圖解、出所等ヲ一表ト爲シ、左ニ示ス表中附言條下「禁轉載」ト記セルモノハ、其出所所藏者ノ許可ヲ得ズシテ、他ニ轉載スルコトヲ勿カランコトヲ警告ス。

因ニ言フ挿入圖中、歐洲あるぷす山ニ關セル數圖ヲ掲ゲタリ、一見本書ト相涉ラザルガ如キ觀アルモ、外人ガ氷河凝雪ノ危險ヲ冒シテ登嶽スルノ狀態、及ビ其山中風色ノ一般ヲ知ラシメ、以テ邦人登嶽ノ氣風ヲ激發鼓舞セシメントスルノ微意ニ外ナラズ、讀者諒焉。

圖種	圖解	出所	附言
石版 第一圖	編纂者庭前ヨリ南東望ノ圖	編纂者ノ撮影ニ係ル寫眞ニヨル	
寫眞版 第二圖	洪牙國ちろる、ほーへんうえるん、ノ西部ちろー、たーら、あるべん	井上氏所藏	禁轉載
同 第三圖	同上ぼるん氷河	同	同
	同上べるりーな旅舍ヨリしえんびひらー山頂ニ至ル途中めーせんヲ望ム	同	同
同 第四圖	同上しえんびひらー、ぼるん絕頂	同	同
	同上しわるつ	同	同
同 第五圖	瑞西いぜるわんどノ登山鐵道	友人所藏ノ繪端書ニヨル	
同 第六圖	瑞西四林湖ヨリりーきヲ望ム	同	
	瑞西じゆねーぶヨリもんぶらんヲ望ム	同	印刷不明ニシテもんぶらん判然セズ
同 第七圖	一切經山ノ火口湖五色毛ノ結氷ヲ隔テ、家形山ヲ望ム	田中氏所藏	

同 第八圖	檜原湖ヨリ磐梯山ヲ望ム	同	
同 第九圖	輕井驛ヨリ前掛山及ビ淺間山ヲ望ム	小島氏所藏	禁轉載
	淺間山ノ噴煙夕陽ニ映ズ	同	同
同 第十圖	御坂峠ヨリ河口湖ヲ隔テヽ富士山ヲ望ム	田中氏所藏	
	長濱村丘山ヨリ河口湖ヲ隔テヽ御坂峠連山ヲ望ム	同	
同 第十一圖	富士ノ噴火孔址	小島氏所藏	禁轉載
	影富士	同	同
同 第十二圖	精進湖中ニ見ユル富士熔岩	田中氏所藏	
同 第十三圖	白峰ノ頂上ヨリ鳳凰山及甲州駒ヶ嶽ヲ望ム	小島氏所藏	禁轉載
同 第十四圖	野呂川ヨリ富士山遠望	同	同 印刷不明ニシテ富士山判然セズ
同 第十五圖	甲州白峰北嶽ノ絶巓	同	同
同 第十六圖	甲州白峰西方ノ峭壁	同	同
同 第十七圖	白馬嶽ノ絶巓及ビ其大殘雪	同	同 此圖ハ「チブカダヒラ」ヨリ柄子ヶ嶽ヲ望ムモノニシテ白馬嶽ニアラズ此ニ訂正ス
	常念ヶ嶽ヨリ穗高山及ビ鎗ヶ嶽連山ヲ望ム	同	同

第十八圖			
同 第十九圖	鎗ヶ嶽頂上ノ一峰	同	同
同 第二十圖	鎗ヶ嶽ノ絶巓劍ヶ峰	同	同
同 第二十一圖	阿房峠ヨリ穗高山ヲ望ム	同	同
同 第二十二圖	徳合峠ヨリ乘鞍ヶ嶽及ビ御嶽ヲ望ム	同	同
銅版 第一版	八ヶ嶽近傍地圖	佐々木氏製圖	
同 第二版	富士山近傍地圖	同	
同 第三版	富士山頂大觀ノ圖	同	
同 第四版	白峯山赤石山近傍地圖	同	
同 第五版	吉野群峰	同	
同 第六版	鎗ヶ嶽、乘鞍嶽、御嶽、近傍地圖	同	
同 第七版	阿蘇山地圖	同	
木版 二頁	爺嶽	志賀氏著 風景論	
同 四頁	女阿寒嶽ノ最高點	同	原本圖解男阿寒嶽ト阿寒富士ヲ混合セリ

同	六頁	樽前山	谷文晁著名山圖會
同	七頁	有珠嶽	同
同	八頁	マクカリヌプリ	同
同	一〇頁	恵山	同
同	一二頁	姫神嶽	同
同	一三頁	早池峰山	同
同	一六頁	金華山	同
同	一九頁	釜伏山	同
同	二〇頁	八甲田集合火山	地學雜誌
同	二一頁	七時雨山	名山圖會
同	二三頁	岩手山	名勝地誌
同	二四頁	駒形嶽	地學雜誌
同	二五頁	南昌山	名山圖會
同		岩木山	名勝地誌

原本 玉東山	同 早池峰	原本 臥釜山	
原本 志利邊津山	原本 白岳		

同	二八頁		
同	三一頁	森吉山	地學雜誌
同	三四頁	鳥海山噴火口	地質調査所
同	三五頁	鳥海山	名勝地誌
同	三九頁	靈山	同
同	五〇頁	筑波山	名山圖會
同	五二頁	筑波山頂鶴ヶ原ヨリ同最高點女体山巓ヲ望ム	編纂者撮影ノ寫眞ニヨル
同	五七頁	甲斐國金峰山腹ヨリ四南連山ヲ望ムノ圖	地質調査所
同	六三頁	武甲山	名山圖會
同	七一頁	大山	同
同	八〇頁	鋸山	同
同	八二頁	鹿野山	同
同	八七頁	山形自由新聞掲載八月二十八日御釜之狀況	地質調査所
同	八八頁	半田山	名山圖會

禁轉載	原本 鉅山	同 加納山
禁轉載	原本 武光山	
禁轉載		

同	九〇頁	吾妻山八月中旬景況	地學雜誌	
同	九三頁	若松町ヨリ磐梯群峰ヲ望ム	地質調査所	禁轉載
同	九五頁	安達太郎山	名山圖會	原本 吾田多良山
同	九八頁	二岐嶽	同	同 二股山
同	九九頁	旭嶽	同	同 朝日嶽
同	一〇〇頁	荷置場ヨリ茶臼山噴火孔ヲ望ム	震災豫防調査會	禁轉載
同	一〇一頁	雞頂山	名山圖會	原本 高原山
同	一〇七頁	大眞名子山頂ヨリ南三十度西ニ男体山ヲ望ム	震災豫防調査會	禁轉載
同	一一三頁	鍬柄峠ヨリ東方ヲ望ム	同	同
同	一一五頁	上州西群馬郡小野子山頂ヨリ西南稜名山ヲ望ム圖	地質調査所	同
同	一一七頁	上州吾妻郡鹿桑村ヨリ南方淺間山ヲ望ム圖	同	同
同	一二〇頁	碓氷嶺	名山圖會	原本 碓井嶺
同	一二四頁	妙義山	同	同 妙儀山
同		御神樂嶽	新編會津風土記	

同	一三九頁			
同	一五二頁	上野吾妻郡白根山頂字湯釜之圖	地質調査所	禁轉載
同	一五八頁	米山	名山圖會	
同	一五九頁	信濃國上水内郡野尻湖畔ヨリ斑尾山ヲ望ム	信濃奇勝錄	
同	一六〇頁	越後國岩船郡岩船町ヨリ佐渡島遥望ノ圖	地質調査所	禁轉載
同	一六一頁	日本海ヨリ東南佐渡ヲ望ムノ圖	同	同
同		佐渡加茂郡國見坂ヨリ大佐渡及國中一望ノ圖	同	同
同	一六三頁	越後國中頸城郡田口停車場附近ヨリ西方妙高山ヲ望ム	震災豫防調査會	同
同	一六六頁	越後國中頸城郡吹原村ヨリ島道村ニ至ル嶽上ヨリ燒山ヲ望ムノ圖	地質調査所	同
同	一七〇頁	黑姫山	編纂者撮影ノ寫眞ニヨル	
同	一七六頁	信州諏訪郡湖東村ヨリ北方立科山ヲ望ムノ圖	地質調査所	禁轉載
同	一七八頁	信濃國諏訪郡中新田字組平ニ於テ八ケ嶽ヲ望ム	同	同
同	一九〇頁	愛鷹山	名山圖會	原本 足高山
同	一九二頁	足柄山	同	

同	二〇三頁	大室山	震災豫防調査會	禁轉載
同	二〇四頁	天城山	名山圖會	
同	二〇七頁	波浮港ヨリ北方二子山ヲ隔テ、三原山ノ噴汽ヲ望ム	震災豫防調査會	禁轉載
同	二一〇頁	守屋嶽	大澤氏所藏	
同	二一一頁	上伊那郡三峰川黑川落合ヨリ甲州駒嶽ヲ東望ス	地質調査所	禁轉載
同	二一三頁	白崩山	同	同
同	二二六頁	秋葉山	名山圖會	
同	二三一頁	朝熊山	同	
同	二三五頁	山上嶽	同	原本 金峰山
同	二三九頁	高野山	同	
同	二四五頁	果無山	同	原本 無終山
同	二四六頁	雲取山	同	同 雲鳥嶺
同	二四八頁	那智山	同	
同		駒嶽	同	

	二五〇頁			
同	二五二頁	下伊那郡桑原嶽上ヨリ駒嶽連山ヲ四望ス	地質調査所	禁轉載
		高遠町ヨリ西方駒嶽ヲ望ム	同	同
同	二五四頁	惠那嶽	名山圖會	原本 惠奈山
同	二五六頁	鳳來寺山	同	
同	二六四頁	立山	同	原本 別山ヲ剮山ニ作ル
同	二六六頁	立山雄山神社	名勝地誌	
同	二六九頁	婦負郡四ツ屋村ヨリ立山連山曉望	地質調査所	禁轉載
		婦負郡大久保村ヨリ立山連峰ヲ望ム	同	同
同	二七六頁	南安曇郡宮瀬川ノ渡リ瀬ヨリ有明山ヲ望ム	善光寺名所圖會	
同	二八〇頁	乘鞍嶽	理科大學	禁轉載
		乘鞍嶽北ヨリ南望	地質調査所	同
同	二八二頁	野麥村乘鞍嶽登山路八合目ヨリ北望	同	同
同	二八五頁	御嶽	名山圖會	

同	二八七頁	乘鞍嶽三角點ヨリ御嶽ヲ望ム	地質調査所
禁轉載			
同	二九二頁	稲葉山	山水奇觀
同	二九八頁	白山	名山圖會
同	三〇一頁	白山ノ頂上	地質調査所
禁轉載			
同	三一一頁	伊吹山	名山圖會
原本	勝吹山		
同	三一四頁	多度山	同
同	三二一頁	野州川鐵橋ヨリ三上山ヲ望ム	名勝地誌
同	三二四頁	錫杖嶽	名山圖會
原本	百丈嶽		
同	三二六頁	尼嶽	同
原本	天嶽		
同	三三四頁	春日山	同
同	三三七頁	二上山	同
原本	三上山		
同	三三八頁	葛城山	同
同	三四〇頁	金剛山	同
同	鬼城山		山水奇觀

同	三四七頁		
同	三四八頁	比良山	名山圖會
同	三五〇頁	比叡山	同
同	三五四頁	愛宕山	同
同	三五八頁	武甲山	同
原本	六甲山		
同	三六〇頁	摩耶山	同
同	三六五頁	高爪山	地質調査所
禁轉載			
同	三七一頁	石槌山	愛媛面影
同	三七九頁	五劍山	名山圖會
同	三八三頁	象頭山	同
同	三八五頁	先山	同
同	三九一頁	書寫山	同
同	三九二頁	御岡山ヨリ豐岡平野及來日嶽ヲ望ム	地質調査所
禁轉載			
同	三九三頁	門尾村ヨリ但馬國境屏山ノ山脈ヲ望ム	同

同	三九七頁	美德山	山水奇觀	
同	四〇〇頁	大山	名山圖會	
同	四〇八頁	室ノ内峠ヨリ三瓶山ヲ見ルノ圖	地質調査所	禁轉載
同	四一六頁	右田嶽	大日本名所圖錄	
同	四三八頁	高良山	山水奇觀	
同	四四九頁	彦山	名山圖會	
同	四五七頁	阿蘇山	震災豫防調査會	禁轉載
同	四五九頁	同	繪畫書ニヨル	
同	四六四頁	溫泉嶽	名山圖會	原本雲仙嶽
同	四六九頁	開聞ケ嶽	風俗書報	
同	四七一頁	霧島山	名山圖會	原本四東霧島山ヲ錯記セルモノヽ如シ
同	四七四頁	逆山ヨリ北方霧島山一望ノ圖	地質調査所	禁轉載
同	四七五頁	高千穗峰ヨリ西北霧島山一望ノ圖	同	同
同		櫻島嶽	名山圖會	
同		小野嶽	同	
同	五六二頁	高妻山	小島氏所藏	禁轉載
同		伊豆國田方郡久連村ニ於テ富士及ビ四近連山ヲ望ム	地質調査所	同
同		國府津北方山上ヨリ箱根火山ヲ遠望ス	震災豫防調査會	同
別圖				
銅版別圖		日本群島山嶽系統圖	佐々木氏製圖	
	四八三頁			

一引用書名略號

《提要》日本地誌提要　《風景》日本風景論
《名勝》日本名勝地誌　《摘譯》はんどぶつく、ふぉあ、じゃぱん
《日精》日本地理精說　《航薇》航薇日記
《地辭》大日本地名辭書　《遊記》遊蘗賸記
《大風》大日本風土記　《東遊》東遊記
《大府》大日本府縣志　《風俗》風俗書報
《地名》帝國地名大辭典　《太陽》太陽

《陸日》陸の日本　《北名》北海道名所案內
《地學》地學雜誌　《石狩》石狩日誌
《聞老》奥羽觀跡聞老志　《津輕》津輕のしるべ
《陸志》陸中志　《信一》信達一統志
《奥志》陸奥志　《秋風》關の秋風
《細道》奥の細道　《白河》白河風土記
《男鹿》秋田男鹿名勝誌　《信達》信達二郡村誌
《由利》山利郡地誌　《磐古》磐城古代記
《出風》出羽風土記　《新會》新編會津風土記
《出道》出羽の道わけ　《宮名》宮城縣名所舊跡案內
《杜陵》杜陵廼片影　《野國》下野國志
《平志》平泉志　《伊香》伊香保志
《新常》新編常陸國誌　《信奇》信濃奇勝錄
《安房》安房國誌　《信寶》信濃寶鑑

《新武》新編武藏風土記　《善名》善光寺名所圖會
《新相》新編相模風土記　《名寄》越後名寄
《採訪》採訪餘錄　《越案》越佐名勝案內
《上實》上野寶鑑　《佐名》佐渡名勝
《甲國》甲斐國志　《函誌》函山誌
《山梨》山梨鑑　《掛誌》掛川誌稿
《新甲》新編甲斐國町村誌　《增豆》增訂豆州志稿
《道記》海道記　《熱錦》熱海錦囊
《姨捨》姨捨山考　《七島》伊豆七島志
《駿遺》駿河名勝遺蹟　《遠風》遠江國風土記
《靜名》靜岡縣名勝案內　《尾三》尾三地理
《新駿》新編駿河國誌　《尾志》尾張志
《張府》張州府志　《紀續》紀伊國續風土記
《三國》三國地誌　《西名》西國三十三名所

《紀名》紀伊國名所圖會　《大和》大和名所圖會
《勢名》伊勢名勝志　《和志》大和志
《五鈴》勢陽五鈴遺響　《奈名》奈良縣名勝志
《勢參》伊勢參宮名所圖會　《加能》加能寶鑑
《近名》近江名跡志　《越中》越中寶鑑
《越蹟》越前國名蹟考　《越國》越前國誌
《越細》越前國郡縣細志　《美明》美濃明細記
《越勝》越前國名勝志　《新撰》新撰美濃志
《歸雁》歸雁記　《岐案》岐阜縣案內
《鮎江》鮎江志　《岐地》岐阜縣地誌
《足羽》足羽社記　《若越》若越寶鑑
《深山》深山木　《若國》若狹國志
《山溫》山中溫泉案內　《若群》若耶群談
《山名》山州名跡志　《山志》山城志

《雍州》雍州府志　《攝志》攝津志
《河名》河內名所圖會　《攝名》攝津名所圖會
《河志》河州志　《攝陽》攝陽群談
《泉志》泉州志　《但馬》但馬考
《泉名》和泉名所圖會　《丹南》丹南叢話
《宮津》丹後宮津府志　《宮津朱書》同書ノ書入
《播名》播磨名所圖會　《阿名》阿波國名勝記
《播磨》播磨鏡　《美名》美作名所ノ栞
《愛媛》愛媛面影　《備志》備中志
《阿波》阿波國名所圖會　《藝備》藝備國郡志
《讃名》讃岐名勝記　《山口》山口名勝舊蹟圖誌
《讃史》全讃史　《圖錄》大日本名所圖錄
《淡名》淡路名所圖會　《豐國》豐後國志
《淡草》淡路常盤草　《肥志》肥後國志

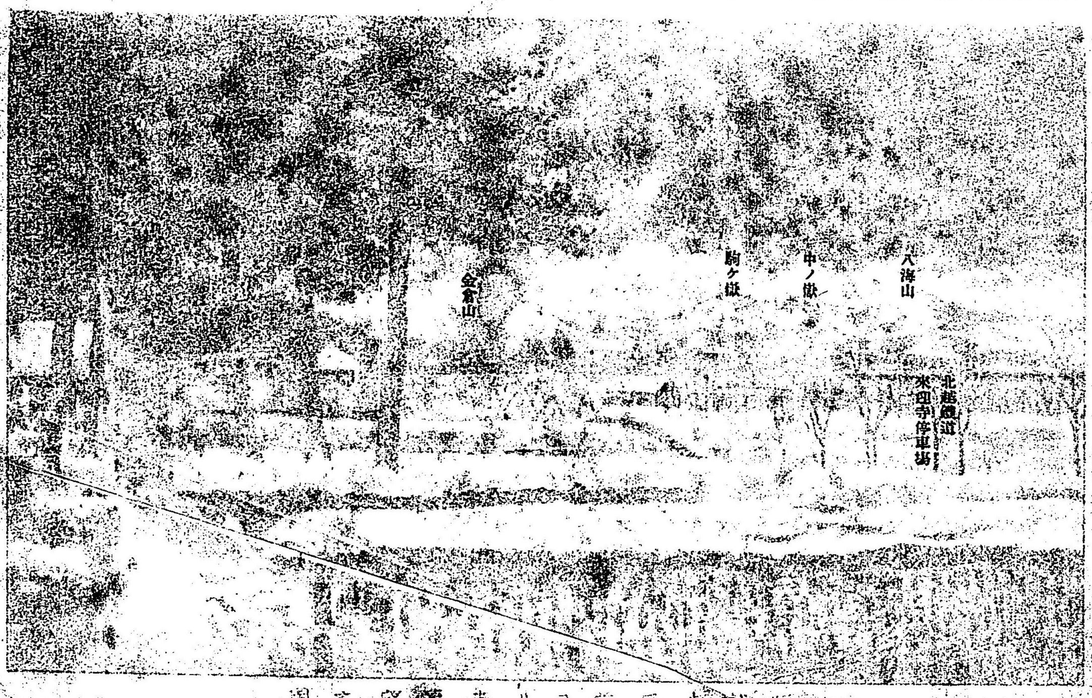
《作陽》校正作陽誌　《熊案》熊本縣案內
《備名》備中名所考　《筑舊》筑前舊志略
《筑風》筑前國續風土記　《豐志》豐前國志
《福岡》福岡縣叢志　《日案》日州名所案內
《臺灣》臺灣諸島誌　《要報》地質要報
《震災》震災豫防調査會報告
《北海》二十萬分一北海道地形圖
《ノ百》百萬分一大日本帝國地形圖
《ノ四》四十萬分一豫察地形圖
《ノ二》二十萬分一大日本地形詳圖
《周士》十萬分一周防長門土性圖
《信士》十萬分一信濃土性圖
《參二》假製二十萬分一臺灣圖
《五マ》五萬分一地形圖

《二マ》二萬分一迅速測圖
《二マ》二萬分一假製圖
《二マ》二萬分一地形圖

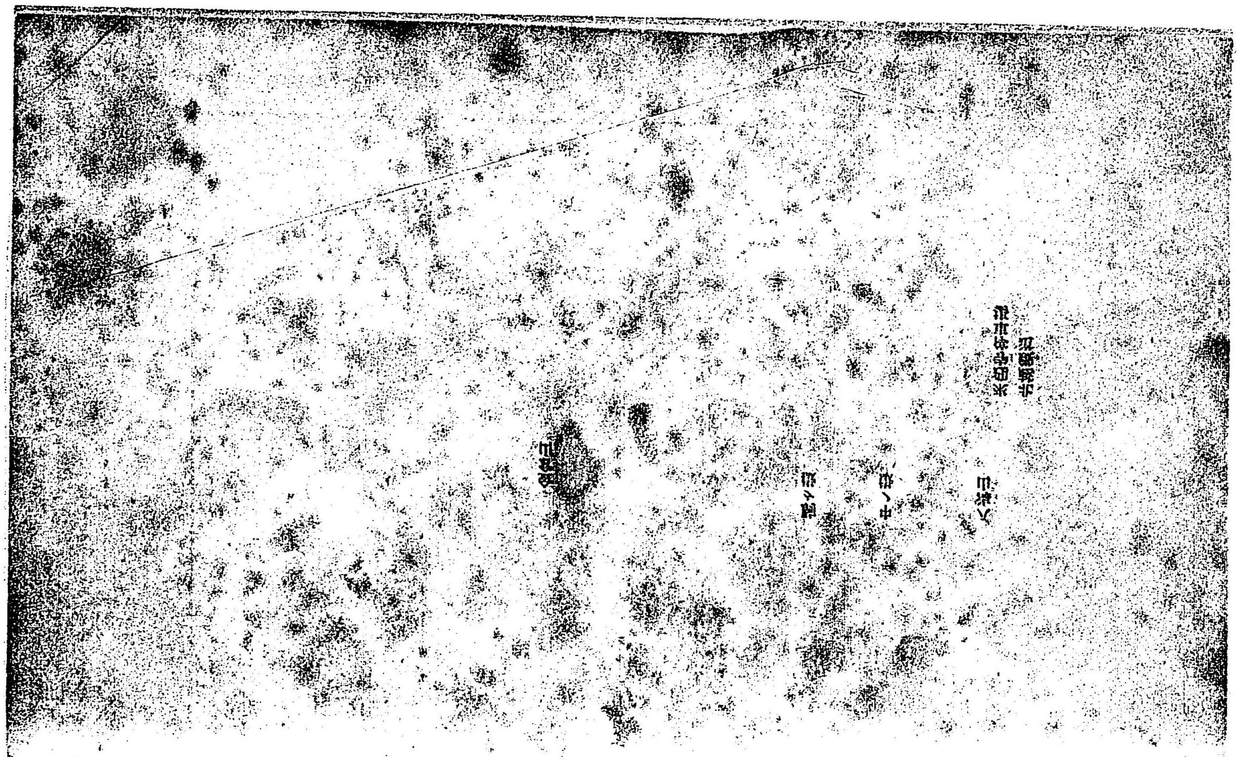
明治三十八年九月二十日

編纂者識ス

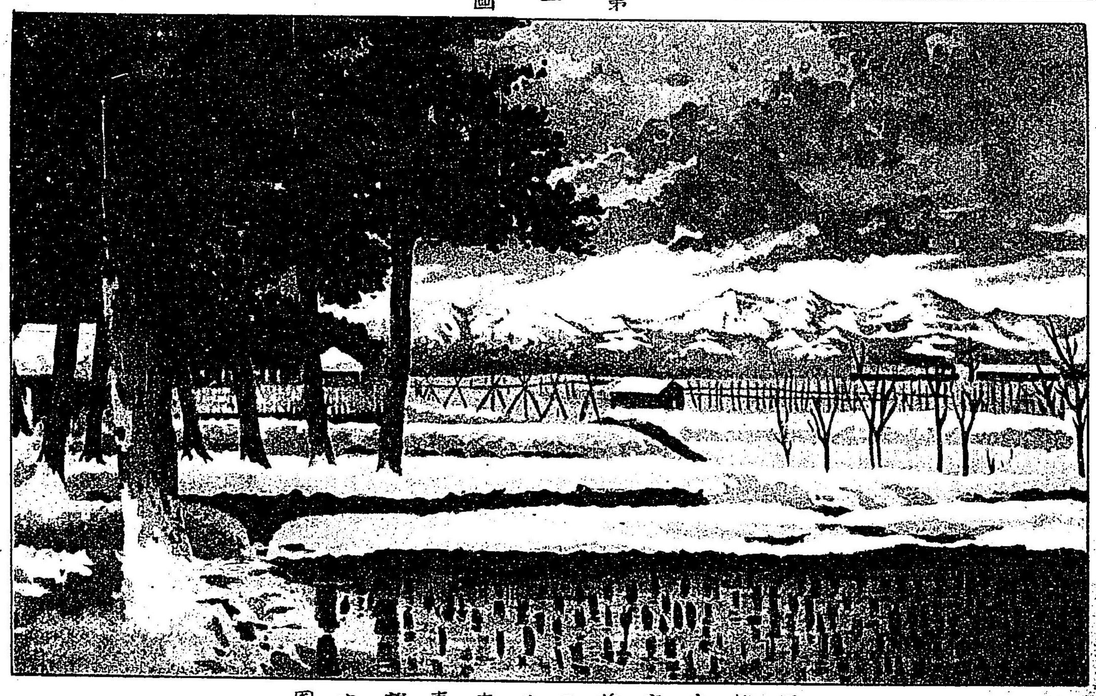
凡例終



塩沢駅前ヨリ南東望之圖

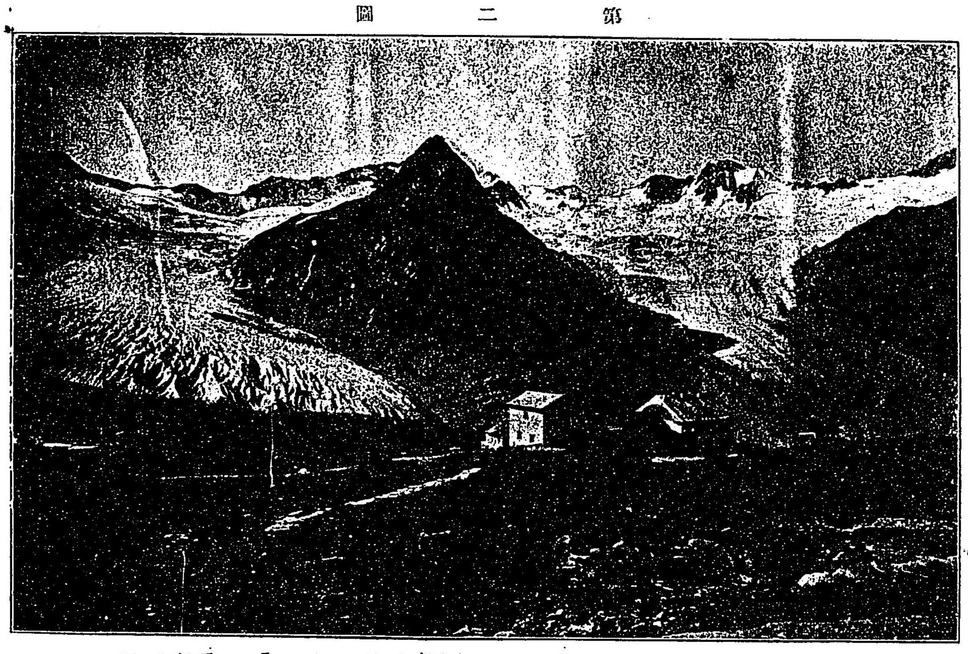


第一圖



編纂者庭前ヨリ南東望之圖

第二圖



禁轉載

井上禄之助氏所藏

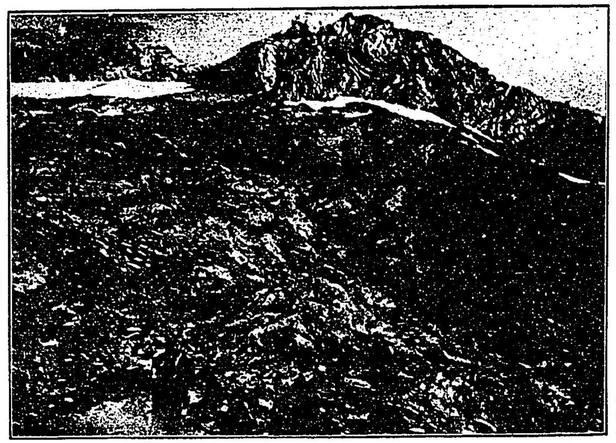
澳匈國チロル「ホーヘンウエルン」ノ西部チラー●ター●ラー●アルペン●

メーセン(海拔三四八六米)　ベルリーナ●ユツテー旅舍(海拔二〇五〇米)　ホルン氷河

第四圖

同上シニンビヒラー、ホルン絶頂

近ク第一番目ハ「テルミエ」教授第三番目ハ「ヤンク」博士



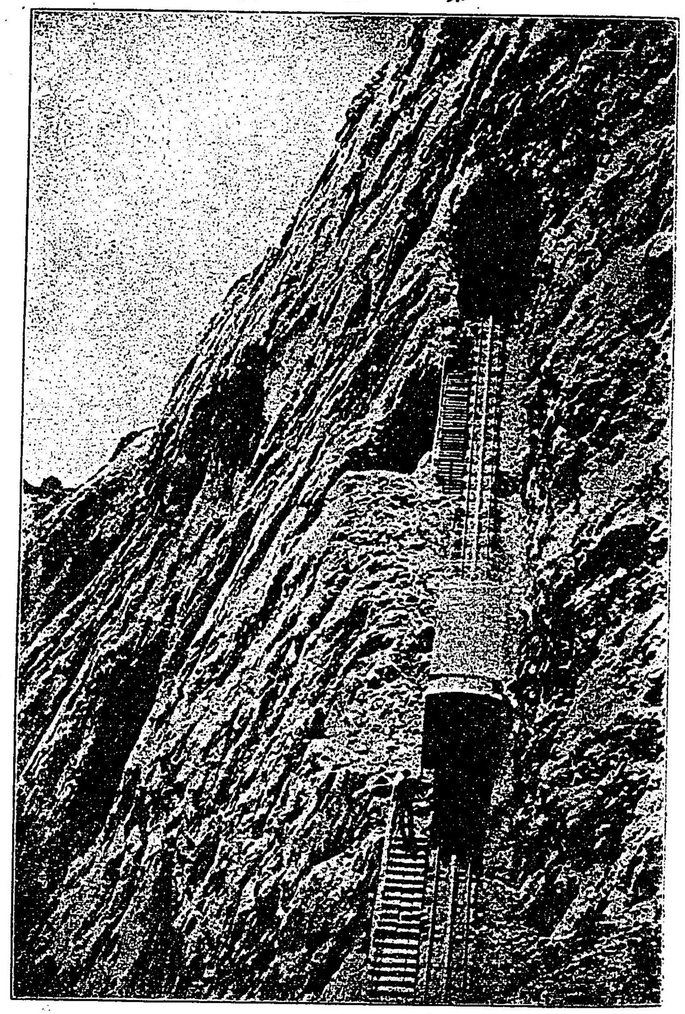
同上シワルッ、ゼー（ベルリーナ、ヒュテーノ北部）

近ク背面シテ立テルハ「ベッケ」教授

禁轉載

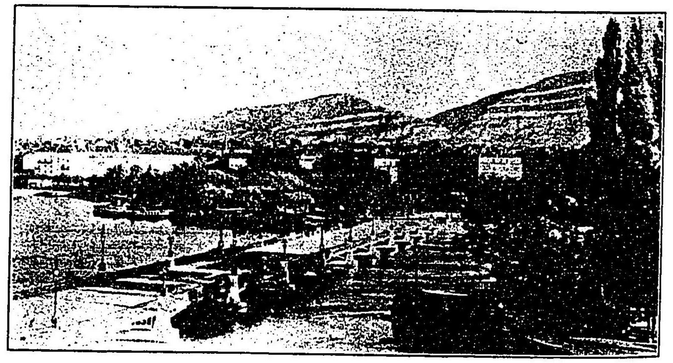
井上禧之助氏所藏

第五圖



瑞西いぜるわんどゝ登山鐵道

第六圖



（上圖）瑞西四林湖ヨリりぎヲ望ム

（下圖）瑞西じゆねーぶヨリもんぶらんヲ望ム

第七圖

田中・阿歌麻呂氏所藏

一切經山ノ火口湖五色沼ノ結氷ヲ隔テヽ家形山ヲ望ム

第八圖

田中阿歌麻呂氏所藏

檜原湖畔ヨリ磐梯山ヲ望ム

第九圖

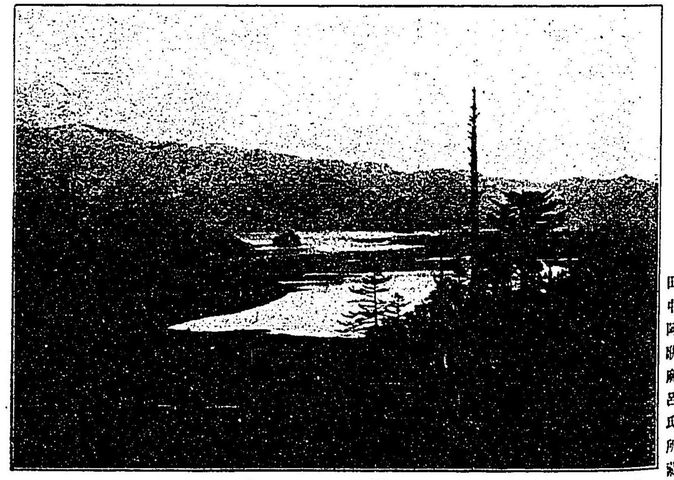
禁轉載

小島烏水氏所藏

（上圖）輕井澤ヨリ前掛山（左方）及ビ淺間山（右方）ヲ望ム

（下圖）淺間山ノ噴烟夕陽ニ映ズ

第十圖



田中阿歌麿氏所藏

（上圖）御坂峠ヨリ河口湖ヲ隔テヽ富士山ヲ望ム

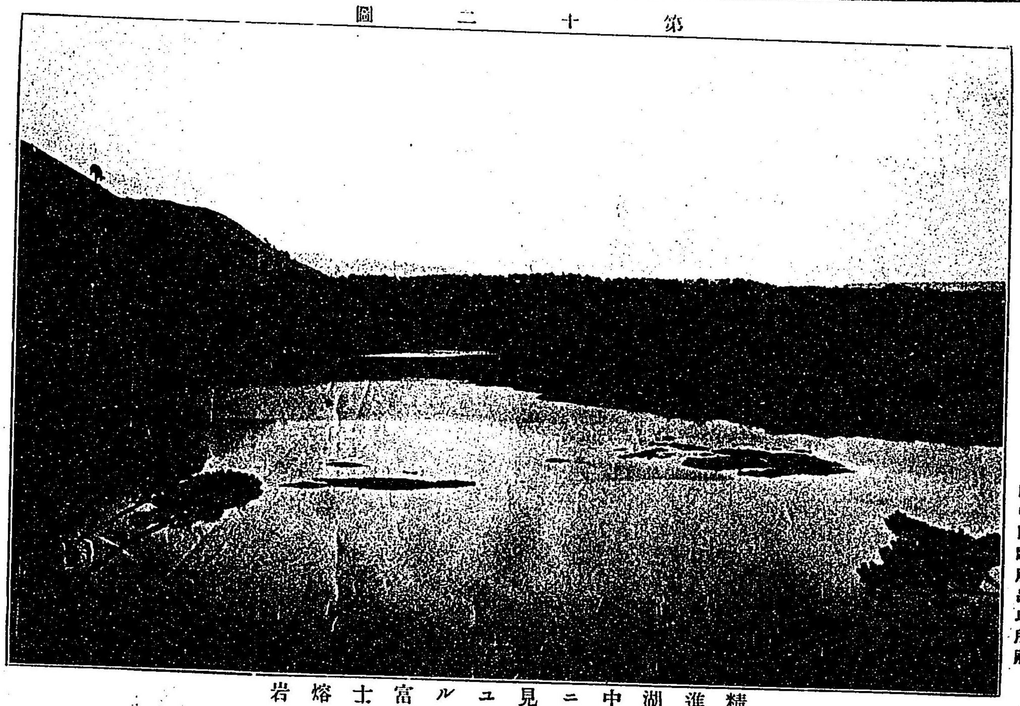
（下圖）長濱村ノ丘上ヨリ河口湖及ビ御坂峠ノ連山ヲ望ム

第十一圖

（上圖）富士ノ噴火孔址（內院）　柴務撮

（下圖）影富士　小島烏水氏所藏

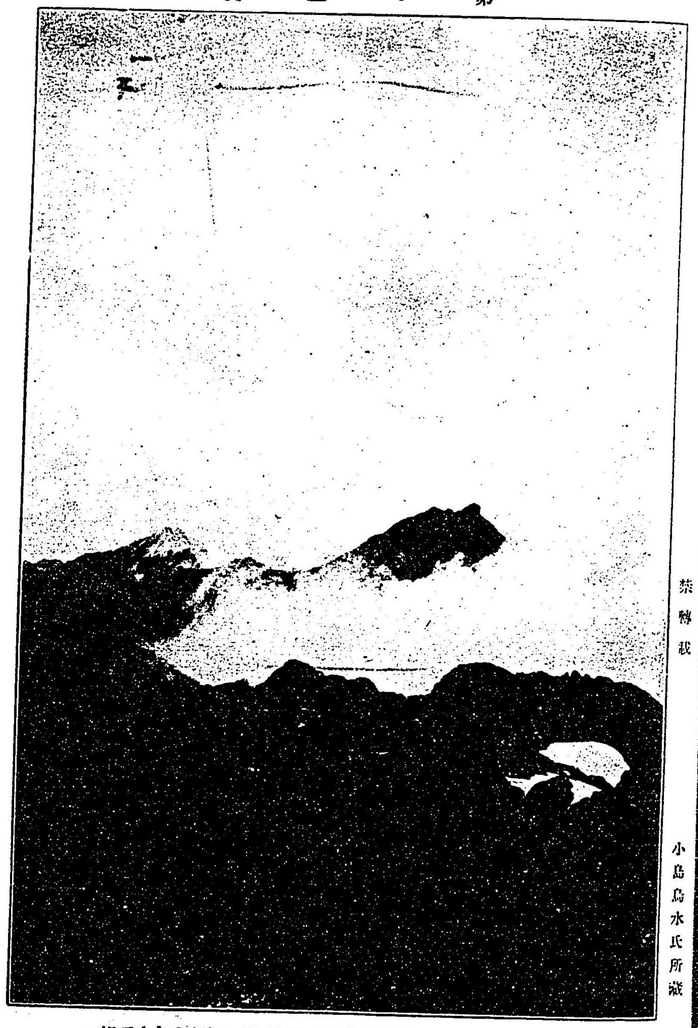
第二十圖



田中阿歌麿呂氏所藏

精進湖中ニ見ユル富士熔岩

第十三圖

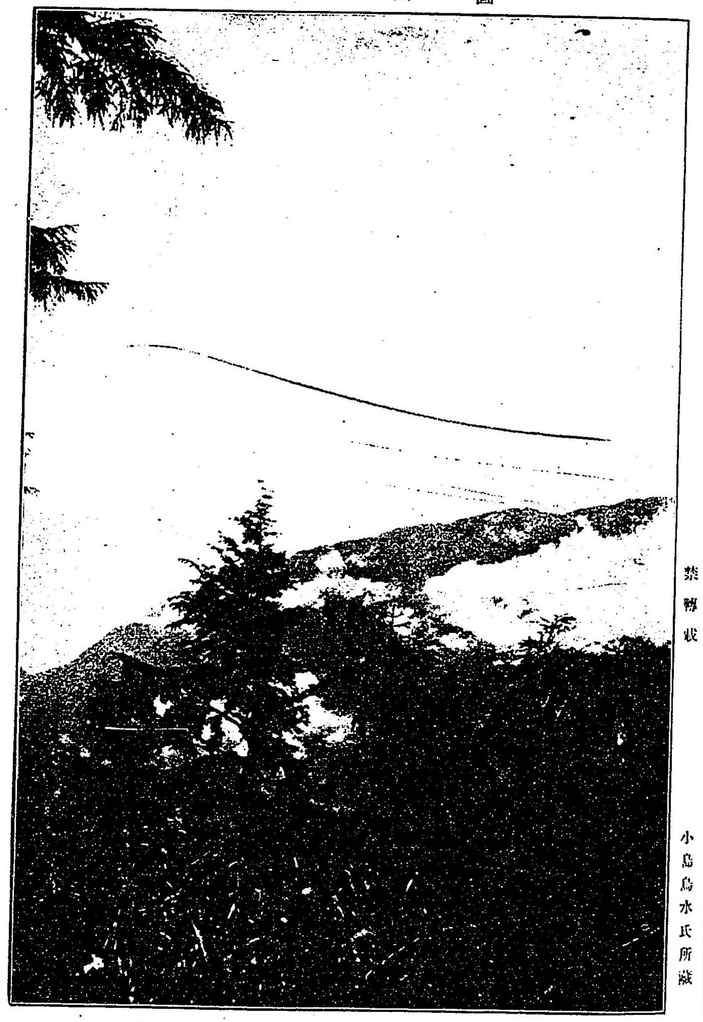


白峯ノ頂上ヨリ鳳凰山(前方)及ビ甲州駒ヶ嶽(上方)ヲ望ム

禁轉載

小島烏水氏所藏

第十四圖

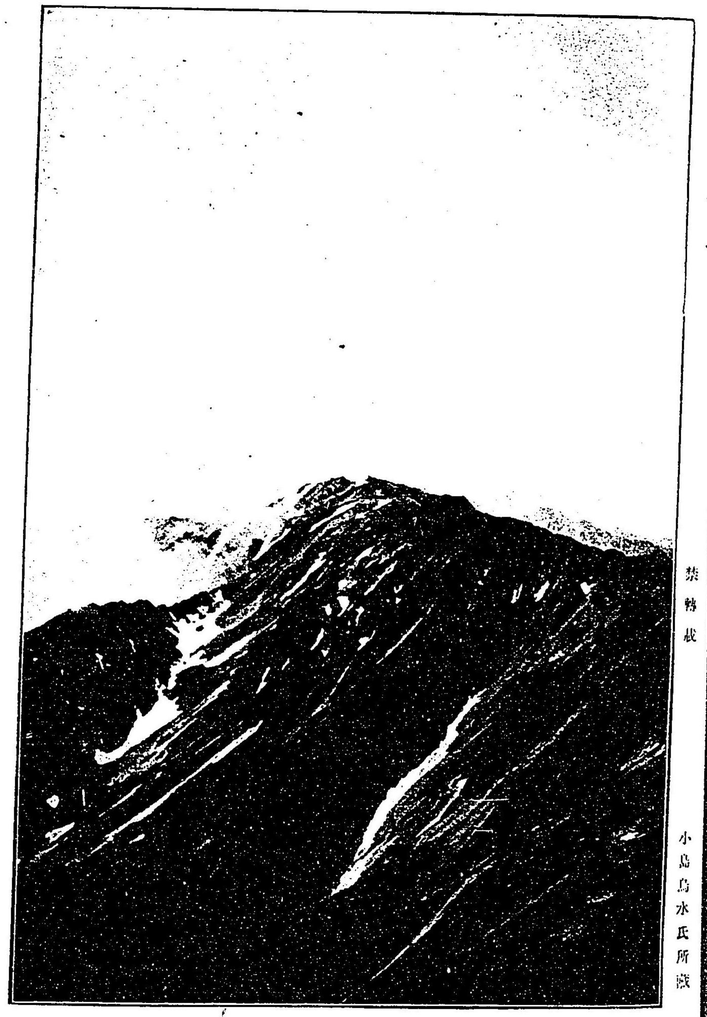


禁轉載

小島烏水氏所藏

野呂川(甲斐國早川ノ上流)ヨリ富士山ヲ遠望ス

第十五圖

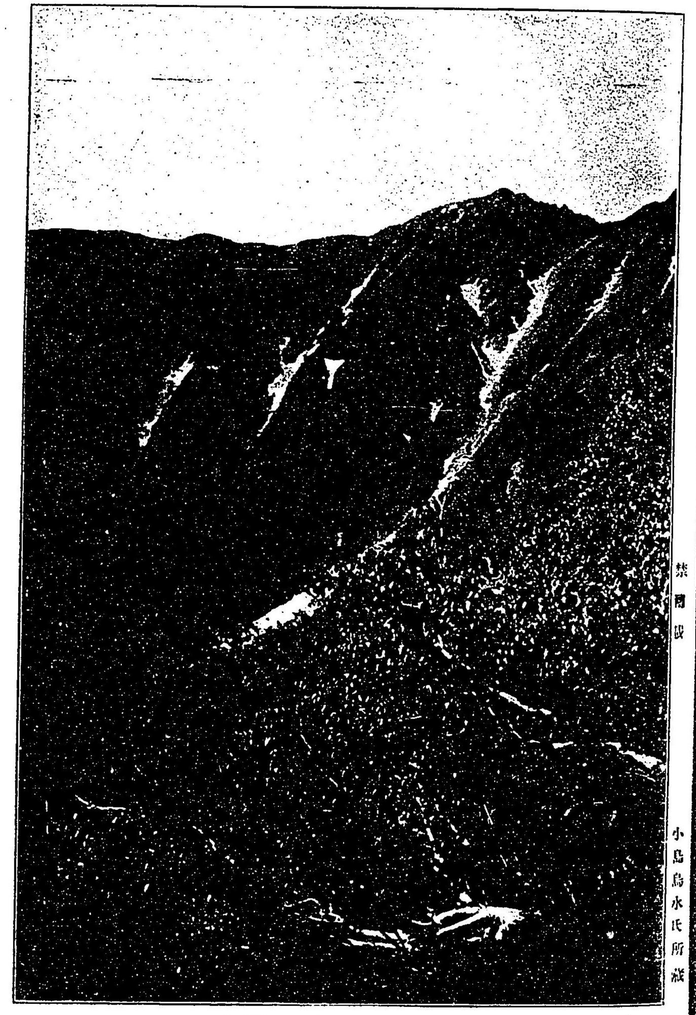


禁轉載

小島烏水氏所藏

甲州白峰北嶽ノ絶巓

第十六圖

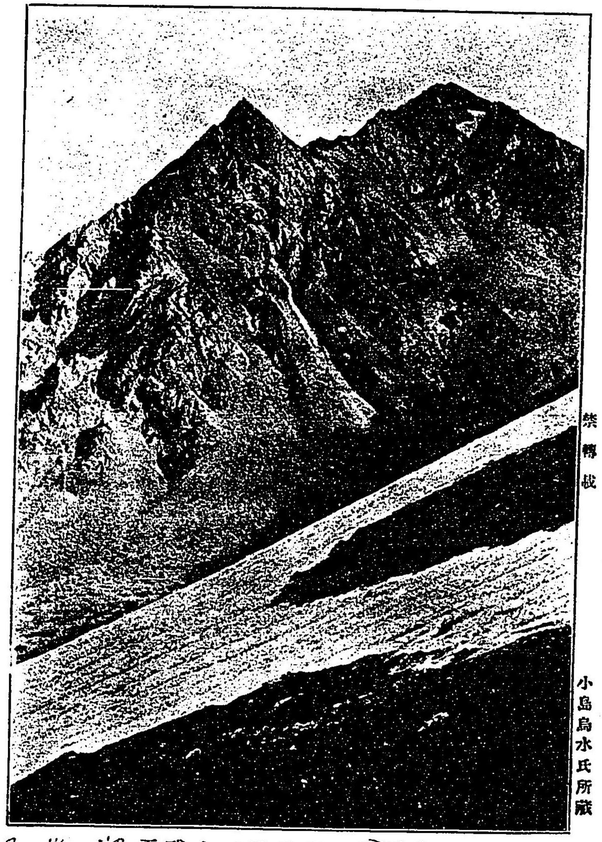


甲州白峰西方ノ峭壁

禁轉載

小島烏水氏所藏

第十七圖



禁轉載

小島烏水氏所藏

白馬嶽ノ絶巓及ビ大殘雪及ビ杓子岳

明治三十七年八月二十日

志村寛氏撮影

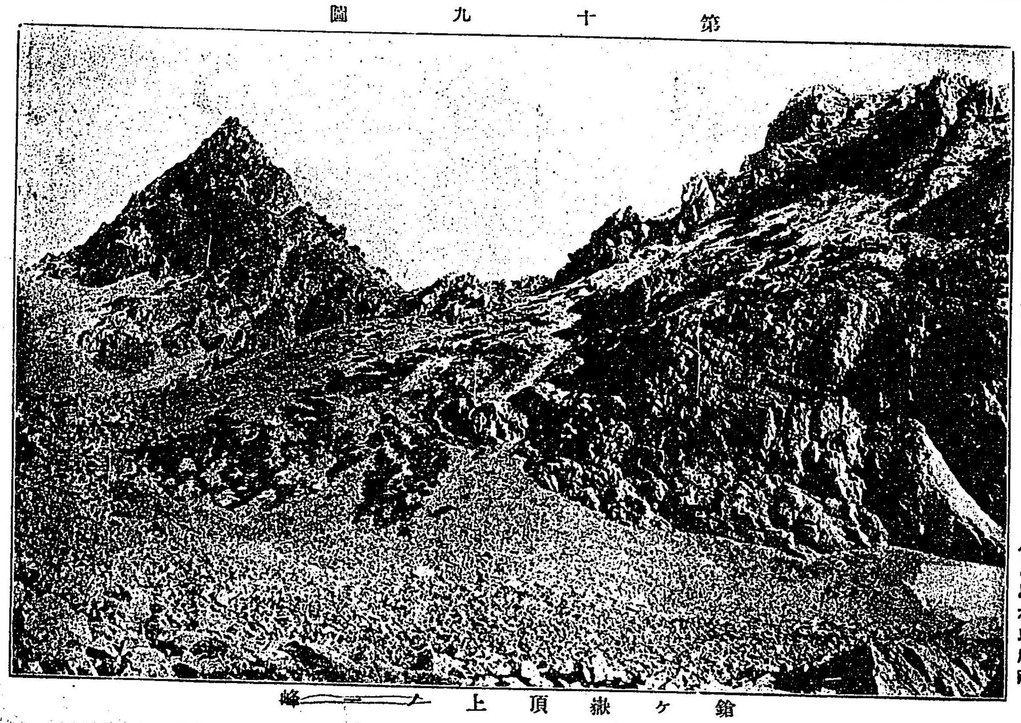
第十八圖

禁轉載

小島烏水氏所藏

常念ヶ嶽ヨリ穂高山及ビ鎗ヶ嶽連山ヲ望ム

第十九圖

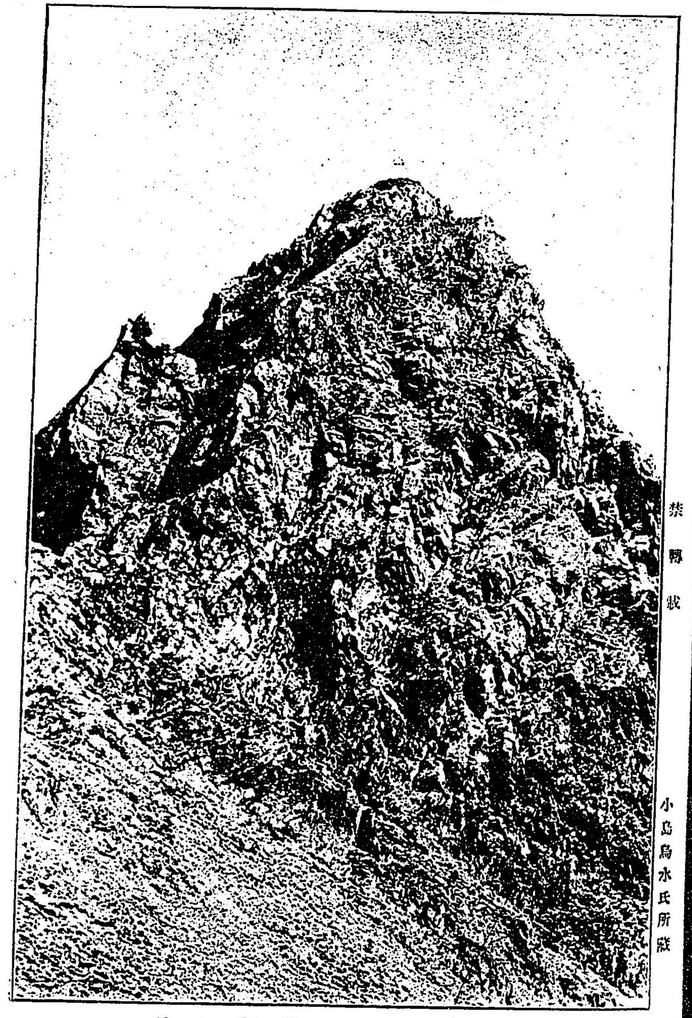


鎗ヶ嶽頂上峰

禁轉載

小島烏水氏所藏

第二十圖

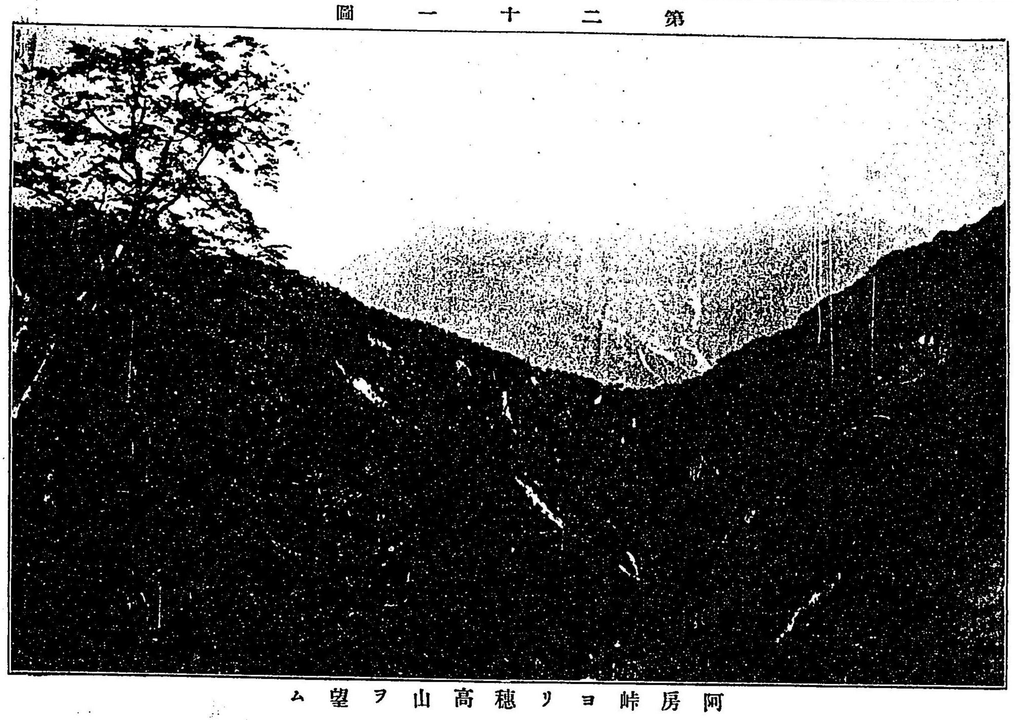


禁轉載

小島烏水氏所藏

鎗ヶ嶽ノ絕巓劍ヶ峰

第二十一圖



阿房峠ヨリ穂高山ヲ望ム

禁轉載

小島烏水氏所藏

第二十二圖

禁轉載

小島烏水氏所藏

德合峠ヨリ乘鞍ケ嶽(前方)及ビ御嶽(上方)ヲ望ム

日本山嶽志

目次

索引

國分索引

○畿内

山城國……一
大和國……二
河内國……四
和泉國……四
摂津國……四

○東海道

伊賀國……五
伊勢國……五
志摩國……六
尾張國……七
三河國……七
遠江國……七
駿河國……八
甲斐國……一〇
伊豆國……一二
相模國……一三
武蔵國……一四
安房國……一五
上總國……一六
常陸國……一六

○東山道

近江國……一七
美濃國……一九
飛驒國……二〇
信濃國……二一
上野國……二四
下野國……二五
磐城國……二六
岩代國……二八
陸前國……三〇
陸中國……三一

陸奥國……三三
羽前國……三四
羽後國……三五
○北陸道
若狭國……三六
越前國……三七
加賀國……三八
能登國……三九
越中國……三九
越後國……四〇
佐渡國……四二
○山陰道
丹波國……四三
丹後國……四四
但馬國……四五
因幡國……四五
伯耆國……四六
出雲國……四六
石見國……四七
隱岐國……四八
○山陽道
播磨國……四八
美作國……四九
備前國……五〇
備中國……五〇
備後國……五〇
安藝國……五一
周防國……五一
長門國……五二
○南海道
紀伊國……五三
淡路國……五四
阿波國……五五
讃岐國……五六
伊豫國……五七
土佐國……五八
○西海道
筑前國……六〇
筑後國……六一
豐前國……六二
豐後國……六三
肥前國……六四
肥後國……六六
日向國……六七
薩摩國……七〇
大隅國……七〇
壹岐國……七一
對馬國……七一
琉球國……七一
○北海道
波島國……七一
石狩國……七一
後志國……七二
天鹽國……七二
北見國……七二
膽振國……七二
日高國……七二

十勝國……七二
釧路國……七二
根室國……七三
千島國……七三
○臺灣

稱呼索引

アの部……七三
イの部……七七
ウの部……七九
エの部……八〇
オの部……八〇
カの部……八三
キの部……八七
クの部……八九
ケの部……九一
コの部……九二
サの部……九四
シの部……九六
スの部……九九
セの部……一〇〇
ソの部……一〇〇
タの部……一〇一
チの部……一〇五
ツの部……一〇六
テの部……一〇七
トの部……一〇七
ナの部……一〇九
ニの部……一一〇
ヌの部……一一一
ネの部……一一一
ノの部……一一二
ハの部……一一二
ヒの部……一一五
フの部……一一七
ヘの部……一一八
ホの部……一一九
マの部……一二〇
ミの部……一二一
ムの部……一二三
メの部……一二四
モの部……一二四
ヤの部……一二五
ユの部……一二六
ヨの部……一二七
ラの部……一二七
リの部……一二七
ルの部……一二八
レの部……一二八
ロの部……一二八
ワの部……一二八
ヰの部……一二九
エの部……一二九
ヲの部……一三〇

字畫索引

一畫……一三一

二書……一三一
三書……一三三
四書……一四〇
五書……一四五
六書……一四九
七書……一五二
八書……一五四
九書……一五九
十書……一六一
十一書……一六六
十二書……一七〇
十三書……一七四
十四書……一七六
十五書……一七八
十六書……一七九
十七書……一八一
十八書……一八二
十九書……一八三
二十書……一八四
二十一書……一八五
二十二書……一八五
二十三書……一八五
二十四書……一八六
二十五書……一八六
二十六書……一八六

登山術

登山に就て……小島烏水……一
登山準備論……一一
一、登山の時季……一四
二、服裝……一九
三、携帶品……二四
四、天幕……二八
五、山中の假家……二九
六、飯料水……三〇
七、食料……三二
八、天候の注意……三四
九、山頂の注意……三五
十、登山雜誌……三六
登山の心得……大平晟……四二
登山術……著者……四八
支那の登山術……五三

山嶽諸說

登山の壯快……矢津昌永……一
山の形……理學博士神保小虎……四
日本のアルプス山に登るべし……志賀重昂……六
高山の特色……理學士山崎直方……一二
富士山と氣象……野中到……四〇
山岳に就て……理學士石川成章……四五
山上發見の太古の遺物遺跡……理學博士坪井正五郎……五二
山岳……理學士佐藤傳藏……五五

日本地質構造概論

原田豐吉氏日本地質構造論概梗……一
小川琢治氏日本群島地質構造論概梗……一八

本編(山嶽各記)

北日本

北海道
◎蝦夷山系
○天鹽山塊
辨花片山……一
羽幌山……一
○日高山塊
神威嶽……一
樣木岩嶽……一
幌郡嶽……一
◎千島火山帶
○擇捉島
摸與呂嶽……二
散粒嶽……二
志登加不嶽……二
雞冠嶽……二
○國後島
爺嶽……二
羅臼山……三
○阿寒火山群
良牛嶽……三
斜里嶽……三
雄阿寒嶽……三
雌阿寒嶽……三
○十勝火山群
石狩嶽……五
オプタテシケ……五
○膽振火山群
千歲嶽……五
樽前山……五
有珠嶽……六
余市嶽……六
幌嶽……七
積丹嶽……七
天狗嶽……七
後別山……七
マクカリヌプリ……七
駒嶽……九
恵山……九
奥羽
◎北上山系
名久井嶽……一一
折爪嶽……一一
浪打嶽……一一

種市嶽……一二
階上嶽……一二
黑森山……一二
姫神嶽……一二
兜神嶽……一三
早池峰山……一三
六角牛山……一四
愛染山……一四
五葉山……一四
氷上山……一四
蓬山……一四
東稻山……一四
室根山……一五
○牡鹿半島
田東山……一五
大六天山……一五
金華山……一五
◎奥羽火山帶
○斗南半島
恐山……一八
釜臥山……一八
○岩手火山群
烏帽子嶽……一八
八幡嶽……一八
八甲田山……一八
高田大嶽……一九
赤倉嶽……一九
朝日嶽……二〇
葛丸山……二〇
南昌山……二〇
阿彌陀嶽……二〇
藥師嶽……二〇
眞壺嶽……二〇
御嶽山……二〇
白木嶺……二〇
八方嶺……二〇
大森嶽……二〇
駒嶽……二〇
橫嶽山……二〇
西嶽……二一
硫黃山……二一
岩手山……二一
大深嶽……二一
駒形嶽……二一
國見嶺……二一
南昌山……二一
葛丸山……二一
朝日嶽……二一
阿彌陀嶽……二一
藥師嶽……二一
眞壺嶽……二一
御嶽山……二一
白木嶺……二一
八方嶺……二一
大森嶽……二一
駒嶽……二一
橫嶽山……二一

酢川嶽……二六
御駒山……二七
篤嶽……二七
高松嶽……二七
小安嶽……二七
東鳥海山……二八
鍋嶽……二八
◎鳥海火山帶
○岩木火山群
岩木山……二八
白神嶽……三〇
田代山……三〇
阿闍羅山……三〇
○森吉火山群
森吉山……三一
大佛嶽……三一
太平山……三一
馬場目嶽……三一
○男鹿島
寒風山……三二
本山……三三
○鳥海火山群
保呂羽山……三三
金峰山……三三
餌嶺……三四
鳥海山……三四
稻村嶽……三七
竪破山……三七
內山……三七
胎藏山……三七
○關東及北越
◎阿武隈山系
靈山……三八
朽人山……四〇
小手神森……四〇
十萬却……四〇
移嶽……四〇
大嶽……四〇
矢大臣山……四〇
神樂山……四一
雲水峰……四一
閼伽井嶽……四一
湯嶽……四一
佛具山……四二
三鈷室山……四二
花園山……四二
堅破山……四二
神峰山……四三
高鈴山……四三
眞弓山……四四
東金砂山……四四
男躰山……四四
西金砂山……四四
○筑波山脈
關山……四五
八溝山……四五
高篠山……四七
慈子山……四七

雞足山……四七
佛頂山……四七
龍神峰……四七
燕峰……四七
我國山……四八
雛台山……四八
加波山……四九
華穂山……四九
筑波山……五〇
◎關東山系
○秩父山塊
御荷鉾山……五五
三國山……五五
兩神山……五五
中信武嶽……五六
國司嶽……五六
乾德山……五六
奥仙丈山……五七
金峰山……五七
雁坂嶺……六〇
三峰山……七二
雲取山……六一
三峰山……六一
熊倉山……六二
武甲山……六二
大霧山……六四
二子山……六四
笠雪山……六五
丹波山……六五
大菩薩嶺……六五
萩原山……六五
初鹿野山……六六
天目山……六六
大嶽山……六六
御嶽山……六七
小佛嶺……六八
高尾山……六九
○御坂山塊
子嶺……七一
近坂……七一
三嶺山……七二
御坂嶺……七三
神座山……七四
十二嶽……七五
櫛代山……七五
雪窪山……七五
天子嶽……七五
雛鶴嶺……七六
○丹澤山塊
御正躰山……七六
三國嶽……七六
大群山……七六
塔嶽……七六
大山……七七
○三浦半島
大楠山……七九
○房總半島

鋸山……八〇
宮山……八一
愛宕山……八一
高塚山……八一
鹿野山……八二
清澄山……八三
三石山……八四
◎那須火山帶
五所山……八四
藥來山……八四
泉嶽……八四
七嶽峰……八五
磐神山……八五
磐……八五
神仙嶽……八五
龍山……八五
千歲山……八五
熊野嶽……八六
藏王嶽……八六
韮神山……八七
篠谷山……八七
虛空藏山……八七
駒戶嶽……九七
明神嶽……九七
博士山……九七
三峰山……九七
櫛代山……九七
二岐嶽……九七
半田山……九七
仙翁嶽……九七
七森嶽……九七
駒……九七
帝釋山……九七
布引山……九六
安積山……九六
背炙嶺……九六
大戶山……九六
神龍山……九六
東吾妻山……八九
檜原嶺……九一
高曾根山……九二
鬼面山……九五
安達太郎山……九五
田代山……九五
背……九五
日……九五
○足尾山塊
地藏嶽……一〇三
西吾妻山……八八
中吾妻山……八八
大作山……八八
甲子山……九八
旭嶽……九九
茶臼嶽……一〇〇
鷄頂山……一〇一
箒根山……一〇二
○帝釋山塊
山王嶺……一〇二
磐梯山……一〇二
荒貝嶽……一〇二
田代山……一〇二
帝釋山……一〇二
駒嶽……一〇三
日山……一〇三

大平山……一〇三
岩舟山……一〇三
○日光火山群
女貌山……一〇四
小真子山……一〇五
大真子山……一〇五
男體山……一〇六
白根山……一〇八
赤安山……一〇九
燧嶽……一〇九
武尊山……一〇九
庚申山……一〇九
二子山……一一二
赤城山……一一二
○淺間火山群
榛名山……一一四
吾嬬山……一一六
鼻曲山……一一六
淺間山……一一六
雄氷嶺……一二〇
妙義山……一二四
荒船山……一二七
◎越後山系
羽黑山……一二七
○月山火山群
月山……一二八
二王子嶽……一三七
鳥朝子嶽……一三八
蒜場嶽……一三八
菱嶽……一三八
五頭山……一三八
高陽山……一三八
○守門火山群
高陽山……一三八
飯谷山……一三八
御神樂嶽……一三九
猩々森山……一四〇
境澤嶺……一四〇
五劍谷嶽……一四〇
祝瓶山……一三六
鷲巢山……一三六
光兎山……一三六
○飯豐山塊
飯豐山……一三六
風倉山……一三七
飯綱山……一三七
蒲萄山……一三七
朝日嶽……一三五

菅名嶽……一四〇
鳴澤峰……一四〇
闇見嶽……一四〇
粟嶽……一四〇
白山……一四一
守門嶽……一四一
朝草嶺……一四一
○清水山塊
大鳥嶽……一四四
大明神山……一四四
駒嶽……一四四
荒澤嶽……一四四
中海山……一四四
八海山……一四五
御月山……一四六
牛嶽……一四六
金城山……一四六
清水嶺……一四七
三國嶺……一四七
稻裏山……一四八
○白根火山群
苗場山……一四八
鳥甲山……一五〇
岩菅山……一五〇
高社山……一五〇
白根山……一五一
萬座山……一五四
黑湯山……一五四
四阿山……一五四
鳥居嶺……一五五
○彌彦火山群
角田山……一五五
多賀山……一五五
升形山……一五七
荻城山……一五六
八石山……一五七
黑姬山……一五七
米山……一五七
斑尾山……一五九
○佐渡島
檀特山……一六〇
金剛山……一六〇
五月雨山……一六〇
金北山……一六二
◎富士火山帶
○妙高火山群
妙高山……一六三
燒山……一六三
乙妻山……一六六
高妻山……一六七
戸隱山……一六八
黑姬山……一七〇
飯綱山……一七〇
一夜山……一七一
蟲倉山……一七一
○八嶽火山群

狭拾山……一七一
冠着山……一七三
聖男神嶽……一七四
和田嶽……一七五
大門嶽……一七五
立科山……一七五
八ヶ嶽……一七七
茅ヶ嶽……一七七
○富士火山群
富士山……一七九
愛鷹山……一九〇
箱根嶽……一九〇
足柄山……一九〇
○伊豆火山群
大室山……一九一
冠嶽……一九五
早雲山……一九五
神山……一九五
駒嶽……一九六
二子山……一九六
箱根嶽……一九七
鞍掛山……二〇〇
聖嶽……二〇〇
日金山……二〇〇
弦巻山……二〇一
玄嶽……二〇二
矢筈山……二〇三
天城山……二〇四
達磨山……二〇六
眞城山……二〇六
鷲巣山……二〇七
○大島
三原山……二〇七
○利島
宮塚山……二〇八
○新島
宮津河山……二〇八
○神津島
天上山……二〇八
○三宅島
雄山……二〇九
○八丈島
西山……二〇九
三原山……二〇九
駒嶽……二一一
白崩山……二一二

南日本

本州中部

◎赤石山系

守屋嶽……二一〇
鉢伏山……二一〇

鳳凰山……二一四
御座石山……二一五
地蔵嶽……二一六
薬師嶽……二一六
源氏嶽……二一六
仙丈嶽……二一六
白峰山……二一六
農鳥山……二一六
笊嶽……二一〇
七面山……二一〇
身延山……二一一
安倍嶺……二一二
篠井山……二一二
龍爪山……二一二
德間山……二一二
白鳥山……二一三
大日山……二一三
天狗石嶺……二一三
三峰山……二一三
七峰……二一四
千社山……二一四
白光山……二一七
尾美山……二一八
本宮山……二一八
光明山……二一八
青崩山……二一八
星切山……二一八
浦川山……二一九
白倉山……二一九
嵩山……二一九
鷲巣山……二一九
観音山……二一九
城山……二一九
淺間山……二一九
本坂山……二二〇
石巻山……二二〇
大川山……二二〇
京丸山……二二〇
大日山……二二七
春野山……二二七
大……二二七

◎紀伊山系

朝熊山……二三一
風巻山……二二〇
加々良嶽……二二五
無間山……二二五
三隅嶽……二二五
星……二二五
茶磨嶽……二二五
赤石山……二二四
高根山……二二四
本宮山……二二八
光明山……二二八
青崩山……二二八
星切山……二二八
浦川山……二二九
白倉山……二二九
嵩山……二二九
鷲巣山……二二九
観音山……二二九
城山……二二九
淺間山……二二九
本坂山……二二〇
石巻山……二二〇

逢坂山……二三二
青峯……二三三
淺間山……二三三
大臺原山……二三三
伯母峯……二三三
薊嶽……二三三
小篠山……二三六
山上嶽……二三四
瀧山……二三四
稻邑嶽……二三四
大天井嶽……二三四
樞嶽……二三四
八鬼山……二三四
保色山……二三四
高原山……二三三
櫛……二三四
大日嶽……二三七
天狗嶽……二三七
地藏嶽……二三七
東嶽……二三七
横尾山……二三七
釋迦嶽……二三七
七面山……二三七
彌山……二三六
城森峯……二三六
護摩壇峯……二三四
荒神山……二三四
生石峯……二三四
龍門山……二三四
麻生津嶽……二三四
高野山……二三八
藤白嶽……二三八
國城山……二三八
玉置山……二三八
仙嶽……二三八
笠捨山……二三八
東屋嶽……二三八
和田峯……二三八
安塔峯……二三八
鉢尖嶽……二三八
殿原山……二三八
鹿瀨山……二三八
白馬嶽……二三八
入道峯……二三八
半作嶽……二三八
三森……二三八
鉢尖嶽……二三八
矢筈嶽……二三八
小清冷嶽……二三八
清冷山……二三八
横山……二三八
虎峯……二三八
十丈嶽……二三八
分龍山……二三八
富田坂山……二三八
果無山……二三八
大塔峯……二三八
法師峯……二三八

大雲取山……二四六
小雲取山……二四七
那智山……二四七
妙法山……二四九
◎木曾山系
駒嶽……二四九
風越山……二五三
惠那嶽……二五三
前山……二五四
鞍掛山……二五四
風來寺山……二五四
段戸山……二五六
本宮山……二五七
宮地山……二五七
猿投山……二五八
二宮山……二五八
小富士山……二五九
◎飛驒高原
黑姬山……二五九
袴腰嶽……二五九
雪倉嶽……二五九
蓮華山……二六〇
白馬嶽……二六〇
乘鞍嶽……二六一
鏡嶽……二六一
笹嶽……二六一
鉢嶽……二六一
天狗嶽……二六一
東鐘釣山……二六二
後立山……二六二
針木嶽……二六二
黑嶽……二六二
羽嶽……二六二
藥師嶽……二六三
立山……二六三
別山……二六三
劍嶽……二七〇
西鐘釣山……二七〇
フナクラケ嶽……二七〇
布倉嶽……二七〇
横嶽……二七〇
三叉嶽……二七〇
眞砂嶽……二七〇
池山……二七一
中俣嶽……二七一
北俣嶽……二七一
烏帽子嶽……二七一
拔戸嶽……二七一
笠嶽……二七一
鎗嶽……二七二
大天井山……二七四
屏風嶽……二七四
雨吹山……二七五
馬羅尾山……二七五
五六嶽……二七五
有明山……二七五
東天井山……二七七

常念嶽……二七七
蝶嶽……二七七
鍋冠山……二七七
穂高嶽……二七七
焼嶽……二七七
硫黄嶽……二七九
乗鞍嶽……二七九
鳥居嶽……二八三
長峰嶽……二八三
織子嶽……二八三
御嶽……二八三
三笠山……二八八
八海山……二八九
織母嶽……二八九
椹谷山……二八九
若櫛山……二八九
井手小路山……二八九
二峰山……二八九
森山……二八九
笠置山……二八九
鉢臥山……二八九
牛嶽……二九〇
金剛堂山……二九〇
祖父山……二九〇
嬬夫山……二九〇
人形山……二九〇
川上嶽……二九〇
位山……二九〇
舟山……二九一
七宗山……二九一
船伏山……二九一
權現山……二九一
稲葉山……二九一
石動山……二九三
宮達山……二九三
二上山……二九三
三國嶽……二九四
倶利伽羅嶽……二九七
醫王山……二九七
袴腰山……二九七
八乙女山……二九七
三方嶽……二九七
笈嶽……二九八
妙法山……二九八
三方崩嶽……二九八
白山……二九八
別山……二九九
釋迦嶽……三〇三
經嶽……三〇三
法恩寺山……三〇四
兜山……三〇四
鷲嶽……三〇四
丈競山……三〇四
富士寫嶽……三〇四
鞍掛山……三〇四
高砂嶽……三〇五
大日嶽……三〇五

毘沙門嶽……三〇五
高賀山……三〇五
瓢嶽……三〇五
明神山……三〇五
中越山……三〇五
屏風山……三〇五
荒島嶽……三〇五
岩嶽……三〇六
能郷山……三〇六
部子山……三〇六
飯降嶽……三〇六
日野山……三〇七
白椿山……三〇七
文珠山……三〇七
夜叉壁山……三〇七
ワントムヅ山……三〇七
木芽嶽……三〇八
鬼嶽……三〇八
厨城山……三〇八
城智山……三〇八
青嶽……三〇九
緑嶽……三〇九
見嶽……三〇九
國……三〇九
高須山……三〇九
横山……三〇九
大タル火山……三〇九
巳高山……三〇九
小谷山……三〇九
大貝山……三一〇
飯盛山……三一〇
小島十九石山……三一〇
美濃中山……三一二
○養老山塊
笙嶽……三一三
養老山……三一三
多藝山……三一三
多度山……三一三
○鈴鹿山塊
霊仙山……三一五
三國嶽……三一五
鳥帽子嶽……三一五
御池嶽……三一五
藤原嶽……三一五
福王山……三一六
釋迦嶽……三一六
水晶嶽……三一六
御在所嶽……三一六
綿向山……三一七
鎌嶽……三一七
雞足山……三一八
鈴鹿山……三二〇
○鷲峰山塊
衣繖山……三二〇
三上山……三二一
阿星山……三二二
飯道寺山……三二二

太神山……三二二
鷲峰山……三二二
高旗山……三二三
篠嶽……三二三
○伊賀山塊
霊山寺山……三二三
錫杖嶽……三二三
經峰……三二三
布引山……三二五
元取嶽……三二五
大山嶽……三二五
尼嶽……三二五
大洞山……三二六
三畝山……三二六
局嶽……三二六
矢頭山……三二七
白猪山……三二七
堀坂山……三二七
雄嶽……三二七

國見山……三二七
三國山……三二八
中山……三二八
高見山……三二八
春日山……三二三
○金剛山塊
屏風嶽……三二九
賓生山……三二九
伊那佐山……三二九
龍門嶽……三二九
多武峰……三三〇
鷹鞭山……三三一
羽音山……三三一
二上山……三三二
竹内嶺……三三二
葛城山……三三二
戒那山……三三二
金剛山……三三二
○和泉山塊
鷹塚嶽……三三二
三輪山……三三二
卷向山……三三三

國見嶽……三三三
一臺山……三三三
高圓山……三三三
春日山……三三三
荒坂嶺……三三四
高尾山……三三四
生駒山……三三四
鷲尾山……三三五
三間石山……三三五
信貴山……三三五
竹内嶺……三三五
葛城山……三三七
九重嶺……三四二
藏王嶺……三四二

七越嶺……三四二
槇尾山……三四二
天野山……三四三
葛城山……三四三
牛瀧山……三四三
風猛山……三四四
犬鳴山……三四四
雲山峰……三四五
懺法嶽……三四五
大福山……三四五
飯盛山……三四五
○丹波高原
榮螺嶽……三四五
野坂嶽……三四五
行市山……三四五
久須夜嶽……三四六
多太嶽……三四六
八峰……三四六
和田山……三四六

青葉山……三四六
彌仙山……三四七
鬼城嶽……三四七
知井山……三四七
大悲山……三四八
比良山……三四八
樫嶽……三四九
三尾山……三四九
比叡山……三四九
御嶽山……三五八
如意嶽……三五八
比叡山……三五八
長等山……三五二
牛尾山……三五二
棧敷嶽……三五三
愛宕山……三五三
船……三五五
八尾山……三五五
畑……三五五
金……三五六
半國山……三五六
劍尾山……三五六

妙見山……三五六
勝尾寺山……三五六
箕面山……三五六
三草山……三五八
再度山……三六〇
神……三六一
○丹後山塊
能野山……三六一
一箇尾山……三六一
成相山……三六一
木積山……三六二

足占山……三六二
三嶽山……三六二
千丈嶽……三六二
普甲山……三六三
由良嶽……三六四
○能登半島
山伏山……三六四
寶立山……三六四
高洲山……三六四
二子山……三六四
別所嶽……三六四
高爪山……三六五
四國及中國
◎四國山系
中津峰……三六六
建治山……三六六
高根山……三六六
雲草山……三六六
燒山寺山……三六六
篠保手山……三六六
本城丸山……三六六
雁又山……三六六
玉採山……三六七
野鹿池山……三六七
高越山……三六七
布生山……三七〇
種穗山……三六七
石槌山……三七一
小劍山……三六七
神南山……三七三
小田山……三七三
矢筈山……三七四
横倉山……三七四
城森山……三七四
出石山……三七四
○室戸半島
篠峰……三七〇
三傍士山……三七〇
鹽塚山……三七〇
野鹿池山……三七〇
布生山……三七〇
石槌山……三七一
神南山……三七三
小田山……三七三
矢筈山……三七四
横倉山……三七四
城森山……三七四
出石山……三七四
國見山……三六九
手筥山……三六九
瓶森山……三六九
篠峰……三七〇
倉石山……三七〇
矢筈山……三七〇
カヽマシ山……三七〇
白髮山……三七〇
津峰……三七五
舍心山……三七五
大龍寺山……三七五
明神山……三七五
天狗山……三七五

玉廚子山……三七六
請峰……三七六
槇小屋山……三七六
石立山……三七六
茁吉森山……三七六
鈴峰……三七六
高善山……三七六
裝束森山……三七六
野根山……三七七
天狗森……三七七
鐘龍森……三七七
八杉森……三七七
○蹉跎半島
五在所森……三七七
堂森山……三七七
石美寺山……三七七
地藏森山……三七八
泉森山……三七八
鬼城山……三七八
黑尊山……三七八
篠山……三七八
○讃岐山脈
袴腰山……三七八
大麻山……三七八
高見峰山……三七八
丸山……三七八
登尾山……三七九
城王山……三七九
伊笠山……三七九
六窪山……三七九
五劍山……三七九
多治川山……三八〇
尾瀨山……三八〇
高仙山……三八〇
御所原山……三八〇
鹽入山……三八〇
大瀧山……三八〇
象頭山……三八〇
七寶山……三八〇
中蓮寺峰……三八〇
雲邊寺山……三八一
曼陀山……三八一
○高縄半島
平賀山……三八一
松山……三八一
笠形峰……三八一
高鉢山……三八一
高見峰山……三八一
丸山……三八一
堤山……三八一
城山……三八一
三頭山……三八一
大川山……三八一
多治川山……三八一
尾瀨山……三八一
鹽入山……三八一
象頭山……三八一
七寶山……三八一
中蓮寺峰……三八一
雲邊寺山……三八一
曼陀山……三八一
星越山……三八一
寒風山……三八一
木綿織山……三八一

高縄山……三八四
○淡路島
常隆寺山……三八五
先山……三八五
柏原山……三八六
諭鶴羽山……三八六
○小豆島
星城山……三八七
寒霞溪山……三八七
◎中國山系
大箕山……三八九
朝來山……三八九
三國嶽……三八九
篠峯……三八九
笠形山……三八九
高御位山……三九〇
中道山……三九〇
廣峰山……三九〇
明神嶽……三九〇
書寫山……三九〇
菅山……三九一
籠山……三九一
那岐山……三九五
氷山……三九一
泉山……三九五
妙見山……三九二
黒澤山……三九六
來日嶽……三九二
三國山……三九六
陣鉢山……三九二
高山……三九六
扇山……三九三
鷲峯山……三九六
久斗山……三九三
美德山……三九七
稲葉山……三九三
人形山……三九七
池田山……三九四
篠向山……三九八
黒尾山……三九四
二上山……三九八
白旗山……三九四
荒神山……三九九
沖山……三九四
高峰山……三九九
後山……三九四
龍天山……三九九
船越山……三九五
大王山……三九九
雛倉山……三九五
蛭山……三九九
八塔寺山……三九五
大山……三九九
熊山……三九五
船上山……四〇一
頭巾山……三九五
三平山……四〇一

大佐山……四〇一
赤瀧山……四〇一
大和山……四〇一
雞足山……四〇一
加茂山……四〇二
金山……四〇二
瑜伽山……四〇二
道後山……四〇三
大倉山……四〇三
三井山……四〇三
三郡山……四〇三
多飯辻山……四〇三
貓山……四〇三
大黒目山……四〇三
御神山……四〇三
高山……四〇四
二子山……四〇四
星居山……四〇五
天神山……四〇五
嶽……四〇五
蛇園山……四〇五
陽生山……四〇五
彌高山……四〇五
三國山……四〇六
矢瀧城山……四〇六
船通山……四〇六
山吹山……四〇六
鎌倉山……四〇六
ッバラコ山……四〇六
高仙山……四〇六
大江高山……四〇六
犬伏山……四〇六
星上山……四〇六
天狗山……四〇六
佛經山……四〇六
清久山……四〇六
美古登山……四〇七
阿圖馬山……四〇七
鯛巣山……四〇七
猿政山……四〇七
大萬木山……四〇七
鳥屋九山……四〇七
黒山……四〇七
鍋山……四〇七
琴引山……四〇八
三瓶山……四〇八
鶴降山……四〇九
雞足山……四〇九
三國山……四〇九
矢瀧城山……四〇九
山吹山……四〇九
ッバラコ山……四〇九
高仙山……四〇九
大江高山……四〇九
犬伏山……四〇九
三石山……四一〇
冠山……四一〇
丸瀬山……四一〇
瀧山……四一〇
白木山……四一〇
大土山……四一〇
岡田山……四一〇
天神嶽……四一〇
宇根山……四一一
熊峰……四一一

鹿巣山……四一一
用倉山……四一一
野呂山……四一一
灰峰山……四一一
吳婆々宇山……四一一
島星山……四一二
刈尾山……四一二
彌畝山……四一二
高城山……四一二
漁山……四一二
大麻山……四一二
十方山……四一二
大峰山……四一二
極樂寺山……四一三
阿生山……四一三
寂地山……四一三
鬼城山……四一三
高鉢山……四一三
羅漢山……四一三
二代木山……四一三
岩國山……四一三
匹見尾山……四一三
小五郎山……四一三
大將陣山……四一四
水尾山……四一四
木谷山……四一四
秘密嶽……四一四
金峰山……四一四
日暮嶽……四一四
要害嶽……四一四
鳥帽子嶽……四一四
石城山……四一四
氷室山……四一五
千坊山……四一五
大座山……四一五
飛嶽……四一五
矢筈嶽……四一五
青野嶽……四一五
德佐峰……四一五
高山……四一五
恭盤嶽……四一五
蕎麥嶽……四一五
右田嶽……四一六
龍門山……四一六
東方便山……四一六
西方便山……四一七
雨乞山……四一七
江嶺山……四一七
平原嶽……四一七
霜降嶺……四一七
櫨現山……四一七
鯨嶽……四一七
桂木山……四一七
如意嶽……四一七
臺山……四一七
花尾山……四一八
日嶽……四一八

荒尾山……四一八
日嶽……四一八
荒瀧山……四一八
櫻山……四一八
高丸山……四一八
雁飛山……四一八
雨乞嶽……四一八
一位嶽……四一八
狗留孫山……四一八
下山……四一九
鬼城山……四一九
龍王山……四一九
○出雲半島
澄水山……四一九
枕木山……四一九
嵩山……四一九
朝日山……四二〇
大船山……四二〇
旅伏山……四二〇
雞鳥帽山……四二〇
鼻高山……四二〇
彌山……四二〇
○嚴島
山……四二〇
○屋代島
嘉納山……四二一
○隱岐島
大滿寺峰……四二一
白岩嶽……四二一
御嶽……四二一
梓嶺……四二一
桑原山……四二一
傾山……四二一
米花山……四二一
釋蹤嶽……四二三
彦嶽……四二三
三方山……四二五
內大臣山……四二五
國見嶽……四二五
白烏峰……四二五
月見山……四二五
薊山……四二五
◎九州山系
天面山……四二三
目丸山……四二五
高楠山……四二五
本宮山……四二三
九嶺山……四二三
甲佐嶽……四二六
間谷山……四二六
鳥屋辻山……四二三
有藏嶽……四二三
鴈俣山……四二六

白山嶽……四二六
矢山嶽……四二六
六本杉山……四二七
保口嶽……四二七
仰烏帽子山……四二七
○上宮山塊
紫尾山……四二七
○市房山脈
速日嶽……四二七
石堂山……四二八
尾鈴山……四二八
天包嶽……四二八
市房山……四二八
法華嶽……四二八
川中嶽……四二九
矢筈嶽……四二九
白髮嶽……四二九
○日向山脈
障泥嶽……四二九
鰐塚山……四二九
小松山……四二九
○大隅半島
國見嶽……四二九
荒西嶽……四三〇
○天草島
老嶽……四三〇
倉嶽……四三〇
帽子嶽……四三〇
○大島
湯灣嶽……四三〇
○筑紫山系
○筑豐山塊
坊住山……四三〇
佛頂山……四三〇
尺嶽……四三〇
彌智山……四三一
平狹野山……四三一
貫山……四三一
湯川山……四三一
孔大寺山……四三二
崎戸峰……四三二
六嶽……四三二
八久保山……四三二
熊峰……四三二
鉾立山……四三二
若杉山……四三三
大谷山……四三三
龍王山……四三三
新建山……四三三
頭巾山……四三四
砥石山……四三四
根智嶽……四三五
砥上山……四三五
古所山……四三六
馬見山……四三六

三取合山……四三七
荒平山……四三七
烏屋山……四三七
牛鼻山……四三七
○水縄山塊
鷹取峰……四三七
耳納山……四三七
高良山……四三七
○山鹿山塊
鳶形山……四三九
高天山……四三九
木葉山……四三九
○背振山塊
基山……四三九
天拜山……四三九
九千部山……四四〇
龜尾山……四四一
前嶺山……四四一
一嶽……四四一
東油山……四四一
背振山……四四一
酒盛山……四四三
牛鼻山……四四三
鬼鼻山……四四三
飯場山……四四三
金立山……四四三
合子山……四四三
鉾塔山……四四三
王丸山……四四三
井原山……四四三
雷山……四四四
獅子鼻嶽……四四四
深江山……四四四
浮嶽……四四五
天山……四四五
◎阿蘇多良火山帶
○阿蘇火山群
兩子山……四四五
馬上峰……四四五
雲嶽……四四五
立石山……四四六
烏帽子山……四四六
由布嶽……四四六
鶴見嶽……四四七
四極山……四四七
城嶽……四四七
鉾塔山……四四七
人見嶽……四四七
鹿嵐山……四四七
八面山……四四八
菌嶽……四四八
鹿熊嶽……四四八
長野山……四四八
五狩倉山……四四八
十石山……四四八
彦山……四四八
犬嶽……四五〇
岩嶽山……四五〇
樋桶山……四五一

松尾山……四五一
鳳股山……四五一
槍原山……四五一
三俣山……四五一
九重山……四五一
大船山……四五一
黑嶽……四五二
涌蓋山……四五二
萬年山……四五三
斷株山……四五三
龜房石山……四五三
尾嶽……四五三
鞍嶽……四五三
二重嶽……四五四
鈴深尾山……四五四
三國嶽……四五四
八方嶽……四五四
黑塚山……四五四
地藏嶽……四五四
釋迦嶽……四五四
波神嶽……四五四
烏宿山……四五五
御前嶽……四五五
平野山……四五五
日向神岩山……四五五
熊渡山……四五六
龍河內山……四五六
無漏山……四五六
高井嶺……四五六
阿蘇嶽……四五六
根子嶽……四五八
祖母嶽……四六〇
蘇母山……四六一
銳山……四六一
大矢山……四六一
冠嶽……四六一
雁回山……四六二
三角嶽……四六二
金峰山……四六二
○多良火山群
溫泉嶽……四六三
蒼山……四六五
多良嶽……四六五
一宮嶽……四六五
杵島山……四六五
黑髮山……四六五
大河內山……四六五
國見嶽……四六五
○平戶島
安滿嶽……四六六
○壹岐島
嶺……四六六
本宮山……四六六
○霧島火山帶
狗留孫嶽……四六六
國見嶺……四六六
國見山……四六六

鋭山……四六七
大關嶽……四六七
鬼嶽……四六七
矢筈山……四六七
冠嶽……四六七
金峰山……四六八
母嶽……四六八
野間嶽……四六八
開聞嶽……四六九
飯盛嶽……四七一
白鳥山……四七一
西霧島山……四七一
東霧島山……四七一
夷守嶽……四八二
白鹿嶽……四八二
高隈嶽……四八二
○櫻島
櫻島嶽……四八三
○對馬島
三嶽……四八四
城嶽……四八四
白嶽……四八四
有明山……四八五
龜……四八五
○牡鹿半島
七森……四九二
紅葉山……四九二
保呂波山……四九二
翁倉山……四九二
大峰山……四九二
大土山……四九二
茶臼山……四九二
○奧羽火山帶
○斗南半島
荒澤山……四九三
縫道石山……四九三
朝比奈嶽……四九三
○津輕半島
增川嶽……四九三
君ヶ鼻山……四九一
鍋越山……四九二
物見山……四九二
山……四九二
○臺灣
○臺灣山系
雪山……四八六
鳳凰山……四八六
新高山……四八六
○大屯火山群
大屯山……四八九
補遺
○北上山系
五葉山（再出）……四九一
高判形山……四九一

大倉山……四九三
梵珠平山……四九三
○岩手火山群
櫛ヶ峰……四九三
十和田山……四九四
中嶽……四九四
清水嶺……四九四
山伏嶽……四九四
牛毛山……四九四
五ツヶ嶺……四九四
惡路石嶽……四九四
戸澤大森……四九四
大土森……四九五
須金嶽……四九五
荒雄嶽……四九五
泥湯嶽……四九五
川原毛山……四九五
杉嶺……四九五
禿ヶ嶽……四九五
花淵山……四九五
水上山……四九五
吹越山……四九六
黑森山……四九六
風倉山……四九六
名月嶺……四九六
國見嶺……四九六
◎鳥海火山帶
○岩木火山群
岩木山(再出)……四九六
泊嶽……四九八
八森嶽……四九八
粕毛嶽……四九八
尾太山……四九八
○森吉火山群
太平山(再出)……四九八
モヤ山……四九八
花塚山……五〇二
矢竹山……五〇二
北明神山……五〇二
羽山……五〇三
○男鹿島
眞山……四九九
○鳥海火山群
高尾山……四九九
神宮寺嶽……四九九
鶯座山……四九九
七高山……五〇〇
八鹽山……五〇〇
東安山……五〇〇
鳥海山(再出)……五〇〇
◎阿武隈山系
副靈山……五〇二
國見山……五〇二
虎捕山……五〇二
無垢路岐山……五〇二
鶯窟山……五〇九
城峰山……五〇九
三ツ山……五〇九
城峰山……五〇九
女嶽……五一〇
賓登山……五一〇
男嶽……五一〇
陳見山……五一〇
馬背山……五一〇

木幡山……五〇三
疣石山……五〇三
高家老山……五〇三
笊冠山……五〇三
和田山……五〇三
五代山……五〇三
西森山……五〇三
東森山……五〇四
カケイ森山……五〇四
國見山……五〇四
八丈石山……五〇四
日山……五〇四
大山……五〇四
五十人山……五〇四
鎌倉嶽……五〇四
枹山……五〇四
鷹鳥谷山……五〇五
切鳥屋山……五〇五
二ッ矢山……五〇五
酒造山……五〇五
五社山……五〇五
三ッ森山……五〇五
日影山……五〇五
黑石山……五〇五
片曾根山……五〇五
蓬田嶽……五〇五
水石山……五〇六
三株山……五〇六
荷路夫山……五〇六
土嶽……五〇六
大嶽山……五〇六
神峰山(再出)……五〇六
鍋足山……五〇七
國見山……五〇七
月居山……五〇七
武生山……五〇八
○筑波山脈
井殿山……五〇八
加賀田山……五〇八
愛宕山……五〇八
◎關東山系
○秩父山塊
御荷峰山(再出)……五〇八
稻含山……五〇九
高見倉山……五〇九
毘沙門嶽……五〇九
鶯窟山……五〇九
城山……五〇九
嶽山……五〇九
三ッ山……五〇九
城峰山……五一〇
女嶽……五一〇
賓登山……五一〇
陳見山……五一〇
馬背山……五一〇

甲武信嶽(再出)……五一〇
金峰山(再出)……五一〇
大洞山……五一一
大日向山……五一一
有間山……五一二
多峰主山……五一二
高篠山……五一二
釜伏山……五一二
長林山……五一二
發山……五一二
都幾山……五一二
天目山(再出)……五一二
御嶽山(再出)……五一三
高尾山(再出)……五一三
○御坂山塊
御坂嶺(再出)……五一四
雨ヶ嶽……五一四
本間澤山……五一五
○丹澤山塊
角取山……五一五
畑尾山……五一五
大洞山……五一五
山伏嶺……五一五
弦約シ嶽……五一五
三境ノ峰……五一五
蛇ヶ嶽……五一九
藥師ヶ嶽……五一九
檜ヶ嶽……五一九
大山(再出)……五一六
鳥尾山……五一七
春嶽……五一七
○房總半島
鬼泪山……五一七
雞毛山……五一七
獨古山……五一七
露路山……五一七
如意山……五一八
寶士山……五一八
富士山……五一八
金剛山……五一八
○那須火山帶
荒神山……五一八
船嶽……五一八
舟形山……五一八
寶森山……五一九
白髮山……五一九
三峰山……五二〇
北泉嶽……五二〇
飯嶽……五二〇
和津倉山……五二〇
面白山……五二〇
水晶山……五二〇
龍駒嶽……五二一
神鏑嶽……五二一
大我妻嶽……五二一
小我妻嶽……五二一
東奥山……五二一

磐神山(再出)……五二二
太白山……五二一
藏王嶽(再出)……五二一
横川嶽……五二二
大刈田嶽……五二三
番城山……五二三
峠田嶽……五二三
虛空藏山(再出)……五二三
深龜山……五二三
壹岐山……五二三
萬歲樂山……五二三
厚樫山……五二三
杭甲山……五二四
吾妻山(再出)……五二四
猫魔山……五二五
磐梯山(再出)……五二五
鐵ヶ城……五二六
高井原山……五二六
安出山……五二六
和尚ヶ嶽……五二六
天狗角力取山……五二六
川桁山……五二六
三森山……五二六
李平山……五二六
黑塚山……五二六
餅箱山……五二七
小籠森山……五二七
十八丁山……五二七
安積布引山(再出)……五二七
小野嶽……五二八
船鼻山……五二八
保城嶺……五二八
鎌房山……五二八
小白森……五二八
大白森……五二八
高倉山……五二八
白河布引山……五二八
男鉢山(再出)……五二八
太郎山……五二八
溫泉ヶ嶽……五二八
櫨太倉山……五二九
笠ヶ森山……五二九
茶臼嶽(再出)……五二九
三倉山……五三〇
○帝釋山塊
猖々森山……五三〇
三ツ岩山……五三一
鳥帽子山……五三一
高倉山……五三一
○日光火山群
赤薙山……五三一
女貌山(再出)……五三一
專女山……五三二
帝釋山……五三二
小眞名子山(再出)……五三二
大眞名子山(再出)……五三三
男鉢山(再出)……五三三
太郎山……五三三
溫泉ヶ嶽……五三四

金精嶽……五三四
白根山(再出)……五三五
笠品山……五三六
迦葉山……五三六
庚申山(再出)……五三六
赤城山(再出)……五三七
榛名山(再出)……五三九
金山……五四一
淺間山(再出)……五四一
籠ノ塔山……五四六
烏帽子山……五四六
湯丸山……五四六
妙義山(再出)……五四六
◎越後山系
○月山火山群
燧嶽……五四九
羽黑山(再出)……五四九
月山(再出)……五五〇
湯殿山(再出)……五五一
○飯豐山塊
藏王山……五五一
白根山(再出)……五五四
櫛形山……五五四
七ッ森……五五一
赤萌山……五五一
赤安山……五五一
飯盛山……五五一
大荒山……五五二
荒岩山……五五二
○守門火山群
松嶽……五五二
東屋山……五五二
鳥屋山……五五二
鋸山……五五二
金倉山……五五二
神倉山……五五三
○清水山塊
大烏帽子山……五五四
朝日嶽……五五四
飯士山……五五四
○白根火山群
三峰山……五五四
白根山(再出)……五五五
阿山(再出)……五五五
○彌彦火山群
菱ケ嶽……五五六
關田山……五五六
◎富士火山帶
○妙高火山群
妙高山(再出)……五五六
雨飾山……五六〇
乙妻山(再出)……五六〇
高妻山(再出)……五六〇
戸隱山(再出)……五六〇
黑姬山(再出)……五六三
飯綱山(再出)……五六三
○八嶽火山群
立科山(再出)……五六四
八ケ嶽(再出)……五六四

○富士火山群
富士山(再出)……五六七
○伊豆火山群
二國山……五六八
長尾山……五六八
猪鼻ヶ嶽(再出)……五六八
乙女嶽……五六八
明神ヶ嶽(再出)……五六九
三床山……五七〇
丸山……五七〇
三國山……五七〇
山伏山……五七〇
五神山……五七〇
上山……五七〇
巢雲山……五七〇
小川澤山……五七〇
遠笠野山……五七一
大川山……五七一
鴻ノ澤山……五七一
奥原山……五七一
三方ヶ嶽……五七一
本嶽……五七一
根古山……五七一
大久須山……五七一
○大島
三原山……五七二
◎赤石山系
東俣山……五七三
白峰山(再出)……五七三
虎杖山……五七四
茶臼山……五七四
荒川山……五七四
大船山……五七四
篠金山……五七四
小澤山……五七四
龍爪山(再出)……五七五
文珠嶽……五七五
惡場山……五七五
池代山……五七六
朝比奈山……五七六
千葉山……五七六
西俣山……五七六
荒川嶽……五七六
千牧嶽……五七六
地藏嶽……五七六
本谷山……五七六
河內嶽……五七七
不動澤山……五七七
門桁山……五七七
櫪生山……五七七
黑法師嶽(再出)……五七七
馬背山……五七七
三森山……五七八
常光山……五七八
勝坂山……五七八
高塚山……五七八
龍馬山……五七八

不動山……五七八
高三ッ山……五七八
大代山……五七八
神妻山……五七八
大智野山……五七九
宮巻山……五七九
◎紀伊山系
大臺原山(再出)……五七九
山上嶽(再出)……五七九
七霞山……五八〇
鉢覆山……五八〇
筒香嶺……五八一
陣ヶ峰……五八一
雨引山……五八一
三里嶺……五八一
矢倉嶽……五八一
藤白嶺……五八一
年毒……五八一
鷹尾山……五八一
眞妻嶽……五八二
太尾嶺……五八二
◎木曾山系
駒ヶ嶽(再出)……五八二
惠那嶽(再出)……五八三
本宮山(再出)……五八三
◎飛騨高原
犬ヶ嶽……五八三
梅山……五八六
下駒ヶ嶽……五八四
針木嶺(再出)……五八六
黑岩ヶ嶽……五八四
上ヶ嶽……五八七
惠夫理嶽……五八四
淨土山……五八七
赤男山……五八四
白兀……五八七
乘鞍ヶ嶽(再出)……五八四
赤兀……五八七
朝日嶽……五八四
瀧倉ヶ嶽……五八八
上駒ヶ嶽……五八四
船峠ヶ嶽(再出)……五八八
蓮華山(再出)……五八八
大日ヶ嶽……五八八
白馬嶽(再出)……五八五
早乙女ヶ嶽……五八八
鎗ヶ嶽(再出)……五八五
不歸嶽……五八五
錫杖ヶ嶽……五八五
上犬ヶ嶽……五八五
赤鬼ヶ嶽……五八五
餓鬼ヶ嶽……五八五
五六嶽(再出)……五八六
祖父嶽……五八六
後立山(再出)……五八六
針木嶺……五八六
上ヶ嶽……五八七
淨土山……五八七
白兀……五八七
赤兀……五八七
瀧倉ヶ嶽……五八八
船峠ヶ嶽(再出)……五八八
大日ヶ嶽……五八八
早乙女ヶ嶽……五八八
天狗平……五八八

國見ヶ嶽……五八八
中嶽……五八八
水晶山……五八八
寺地山……五八九
赤牛嶽……五八九
鍋嶽……五八九
火打ヶ嶽……五八九
西笠山……五八九
東笠山……五八九
南五六嶽……五八九
鍬崎山……五八九
蕎麥形山……五九〇
大門山……五九〇
百山……五九〇
高三郎山……五九〇
金山三峰……五九〇
赤靡不古山……五九〇
奈良ヶ嶽……五九〇
奥三丈山……五九〇
烏帽子山……五九一
擧原山……五九一
千丈平山……五九一
白山(再出)……五九一
鈴ヶ嶽……五九二
高倉嶽……五九三
山……五九三
動……五九三
檜木山……五九三
油坂嶺……五九三
荷暮嶺……五九三
蠅帽子嶺……五九三
一乘城山……五九三
土藏嶽……五九三
金糞山……五九三
七尾山……五九四
虎御前山……五九四
新穂山……五九四
國見山……五九四
伊吹山(再出)……五九四
○鈴鹿山塊
阿彌陀ヶ嶽……五九五
三國ヶ嶽……五九五
アサミヶ嶽……五九六
臥龍山……五九六
鈴ヶ嶽……五九六
八尾山……五九六
龍王嶽……五九六
白倉嶽……五九六
金岩山……五九六
龍王ヶ平……五九六
三子山……五九七
狗尾ヶ嶽……五九七
高畑山……五九七
○鷲峰山塊
甲賀山……五九七
狛坂山……五九七
金勝山……五九七
篠間ヶ嶽……五九七